ラビット・ドット・コム

北川ライム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラビット・ドット・コム

【Ｎコード】
Ｎ００７２Ｇ

【作者名】
北川ライム

【あらすじ】
ある事件が起こった高校に時期を同じくして赴任してきた教師、宇佐美。不審に思い近づく美形歴史教師、稲葉。そして「男」を待つ妖艶な美女、李々子。彼らの正体は？３人の織りなすコメディタッチのミステリー。

ｒａｂｂｉｔ．ｃｏｍ　第１話

終業のベルがまだ新しい女子校の校舎に響き渡る。
女の子特有の甘ったるい香りのする教室は休み時間ともなると、とたんに賑やかになる。

高見カオルは一週間前に赴任してきた新しい生物の教師がテキストをまとめて教室を出ていく様子を眺めていた。
特徴のあるくせっ毛、大きな二重の目、背も高いし足だって長いけれど特に美形って訳でもない。
ただ女生徒の気持ちを引きつける抜群のトークに少し興味を持った。

じっと見ていると視線に気づいたのか目が合った。
ニッと笑いかけてきたのでカオルはわざとプイと顔をそむける。
別に気にする様子もなく彼は教室を出ていった。

「ねえ、カオル、新しい先生イイ感じよね。えーーと、宇佐美先生。話もすごく面白いし、笑うとちょっと可愛くない？」
クラスメイトの香奈が話しかけてきた。

「そう？時々無精ヒゲ生やしてるし、年の割に威厳まるでないし、変な先生。」

「まあカオルは前の生物の清田先生がお気に入りだったんだもんね。」

「そんな事ないよ。」

「・・・なんで死んじゃったんだろうね。」

香奈が大きな声で言ってしまったので、周りの生徒が一瞬シンとした。

宇佐美の前任の生物教師、清田が自宅で一人亡くなっていたのは一ヶ月前。
病死だと発表されていたが、服毒自殺だという噂は知れ渡っていた。
校内の捜査は生徒への影響もあるので教師への聴取くらいに留まっていたが。

カオルはどうしても信じられなかった。
口数は少ないけれど、熱心で優しかったあの先生が。

「まあ、ちょっと暗いとこあったからね。なんか思い詰めてたりしたんじゃない？」
「やめてよ香奈」
「私はやっぱり歴史の稲葉先生みたいな人がいいな～。本当に綺麗な顔してるよね。
スカウトとかされなかったのかな。見てるだけで歴史の時間は幸せなの～わたし。」
「ぜんぜん授業聞いてないでしょ、香奈。」

四時限目の始業ベルが鳴る。
女生徒達はつかの間の休息を終え、席に戻っていった。

開校されてまだ間もない近代的な私立高校の校舎。
職員室に戻ってきた宇佐美に、校医の前園洋子が話しかけてきた。
色白でくるりとした目が可愛らしい。

「少しは慣れました？女の子ばかりの教室ってけっこう怖いでしょ？」

宇佐美はネクタイを緩めながらにこっと笑った。

「そんなこと無いですよ。みんな可愛いです。３０人がじっと私を見てるわけですよ。

そしたらね、次はどんなオチで笑わしてやろうと思うんです。いや、楽しいな～。」

「先生？・・・・ちゃんと授業されてますよね？」

楽しそうに笑っている宇佐美を前園はあきれたように見つめる。けれども宇佐美が来てくれて少しホッとしていた。

清田の死から職員や生徒の間にあったドンヨリした空気が、宇佐美が来てから払拭されたような気がした。

あの明るさが新しい風を入れてくれている気がする。

「あれ？お二人、何話してるんですか？ぼくも次授業無いんで混ぜてくださいよ。」

「稲葉先生。」

一見ホストと見間違いそうなほど濃紺のスーツがよく似合うその歴史教師は、爽やかな笑顔で二人に近づいてきた。

女生徒を虜にするその甘いマスクは女教師の間でもかなりポイントが高かった。

「ごめんなさい、わたし準備があるので」前園は申し訳なさそうに席に帰っていった。

「あ・・・すみませんね。おじゃまだったかな？」
ちらりと稲葉は宇佐美を見た。
「そんなことないですよ。それにしても前園先生って綺麗な人ですね。」
「そうでしょ？ここが女子校で良かったですよ。」
なんで？といった表情の宇佐美と目が合い、稲葉は少し照れて笑った。

「ああ、そういうことですか。」
「まぁ、そういうことですよ。」
二人はクスクスと笑った。

稲葉は横で笑っている宇佐美をもう一度ちらりと見る。
“宇佐美　諒、３４歳。独身。・・・・・・こいつには注意しろよ、稲葉幸一”
稲葉の切れ長の綺麗な目が微かに光った。

学校のあるニュータウンから少し離れた繁華街。
夜の街の明りを映し込んだ黒いガラス張りのオフィスビルの一室。
胸の開いたチュニックを着た一人の女が誰かを待つようにボーッとタバコを吸っている。
整った目鼻立ち、長い睫。ぽってりとした唇。

時々妖艶な溜息をつきながら女は外の街並みを見下ろしている。
背後でドアを開ける音。そして一人の男が入ってきた。
「あ、お帰り～。」
女は主人を待っていた飼い犬のように男に駆け寄った。
「疲れた～～。」
いきなりソファに倒れ込んだ男に近づいて、女は真上から嬉しそうにのぞき込む。
「女の子に囲まれてご機嫌なんでしょ？」
そう言って男の髪をやさしく撫でる。
「バカ言うな。仕事だよ、仕事。それも慣れない仕事。」
「そうね、慣れない仕事よね。」女の手が男の頬にかかる。
「ねぇ、宇佐美せんせい」
クスクス笑う女の手をうっとおしそうに払いのけて宇佐美は体を起こした。
「べたべたするのやめろって李々子。クビにするぞ。」
「またつまんない事言って。いいじゃない、減るもんじゃなし。」
「減るわ。絶対なんか吸い取られてる気がする！」
ふふふと笑いながら李々子は何かファイルの様な物を取り出してパラパラとめくった。
椅子に座り、長い足を組んでから宇佐美をじっと見つめて言った。

「さ、今日はどこまで調べてきたの？
まさか先生だけやって帰ってきたわけじゃないんでしょう？」

・・・・やばい。

宇佐美はちょっと焦った表情を浮かべて、曖昧に笑って見せた。

（つづく）

ｒａｂｂｉｔ．ｃｏｍ　第２話

次の日の放課後、高見カオルは生物室の椅子に一人ポツンと座っていた。

清田が生きていた頃は彼が顧問をしていた理化学研究部に所属していた。
今はもう廃部になってしまったが。
運動は嫌いなのでとりあえず入ったクラブなのだが、
いろんな実験をして知識をくれる清田を尊敬していた。

とつぜん入り口の戸が開いたのでカオルは飛び上がって驚いた。

「あれ？誰かいたの？」

入ってきたのは宇佐美だった。めずらしく白衣を着ている。
宇佐美はカオルを見つけると嬉しそうに微笑んだ。

「ちょうどよかった。君、なんて言ったっけ。前に理科学部にいた子だよね。」
「高見です。」
「高見さん、ちょっと聞きたいことあるんだけどいいかな？」
「・・・・なんですか？」
カオルは少し警戒するように宇佐美を見た。

けれど宇佐美は何も言わずにただ部屋をごそごそと調べ始めた。
机の引き出しや棚のファイル、備品戸棚、実験器具。

「先生？いいんですか、そんな事して。

教頭からあまり触らないように言われてるんですけど。」
「ああ、いいのいいの。気にしないで。」
またごそごそ何かを探し続ける。
「何探してるんですか？」
「うーん、それが分かれば苦労しないんだ。」
間延びした声に何だかムッとしてカオルは立ち上がった。
「では私は失礼します。」
「あ、ちょっと！」
「え？」
「ここ、開かないんだけど。」
宇佐美はおもちゃ箱が空かなくて困ってる子供のような目をして
机の一番下の引き出しを指さした。
「知りませんよ！用務員さんに聞いてください。
私もう帰りますよ。何なんですか、もう！」
思いっきりむくれてカオルは宇佐美を睨みつけた。
その表情をじーっと見つめて宇佐美はニッと笑う。
「かわいいね。」
カオルはそばにあったファイルを思いっきり宇佐美に投げつけた。
訳の分からない構造式の書かれたプリントが足元に散らばる。
「あー、ごめんごめん。もう言わないから付き合って。」

「だから何を。」
「清田先生探し。」
「は？」
カオルはイラッときてまた別のファイルを手に持った。
「ああ、もう投げないで！いや、言い方が悪かった。えーと。そうだなあ。・・例えばね、清田先生が亡くなる前に変わったことなどか気が付かなかった？」
「・・・・・分かりません、そんなこと。いつも無口だし。軽い胃腸炎だったのは知っていますけど。」
「へえ、・・・・そう。」
宇佐美は足元に散らばったプリントを一枚拾い上げてしばらく眺めていた。
「先生？」カオルは眉をひそめてつぶやく。
「なに？」プリントを見ながらの返事。
「あなた、本当に先生なの？」
「・・・・・・・・。」
しばらく二人は黙ってお互いを見つめた。
「先生だよ？」
カオルはさらに強く睨みつける。
「あー・・・・、ええと、うん、わかった。君だけに話すよ。やりにくいし。

教師はついでなんだ。実は調べてるの。」

「何を？」

「清田先生の死の真相を。
教頭に頼まれてね。教師もやりながらの潜入捜査ってとこ。
教員免許持ってるしね。
やっぱり学校としては気になるんじゃないの？何で自殺しちゃったのか。」

「・・・ああ、そう言うことね。ふーん、じゃあ、探偵さんなんだ。」
「まあそう言われればかっこいいけど、何でも屋だよ。・・・あ、これ、内緒だよ。」

慌てたように人差し指を口に持っていく仕草が何となく子供っぽくて愛嬌があった。
つい笑いそうになるのをぐっと堪えて、カオルは白衣を着たそのニセ教師を改めて興味深く見つめた。

「そうなんだ・・・・。で、何か分かったの？」
「何かって、今、調べ始めたんだもん。」
「は？」
「うちのマネージャーと同じ反応するのやめてくれる？
きのう、そのあと殴られたんだから、おれ。」

宇佐美は力なく笑った。

“何だろう、この頼りない探偵は。教師やってるときの方がまだマシじゃない。”

カオルはあきれ果てた。

「ねえ、高見さん。もう一つ聞いていい？清田先生と仲良い先生とか知ってる？」

「さあ・・・。仲いいっていうか、前園先生とつき合ってたって噂は聞いたことあります。

まあ女の子の噂はあてになりませんけど。」

「冷静な判断だ。」

宇佐美はクスッと笑った。

その時後ろの戸がガタンと音を立てた。

スッと戸がスライドし、稲葉が顔を覗かせた。

「あれ？宇佐美先生、何してるんですか？こんなところで。

もう外まっ暗ですよ。やばいんじゃないですか？生徒と二人きりで。

」

二人はちらりとお互いを見た。

「宇佐美先生、補講ありがとうございました。」

「うん、いつでも質問しに来てね。じゃ、気を付けて。高見さん。」

カオルは会釈をして稲葉の横を走り抜け、教室を出て行った。

「補講ですか？先生」

「ええ、ちょっと。」

「それにしてはすごく部屋が散らかってますけど。」

「ああ、・・・ちょっと手をすべらせちゃって。すぐ片づけます。」

散らばったプリントをひざまづいて拾い始めた宇佐美に稲葉がゆっくり近づいた。

「宇佐美先生？」

「はい？」

「もう、やめてもらえませんか？」

「え？」

「ゴソゴソかぎ回るの。」

ゆっくりと振り向こうとした宇佐美はゾクッとする冷たさを感じて動きを止めた。

鋭いナイフを宇佐美の首筋にぴたりと当てたまま、稲葉は冷ややかに笑った。

（つづく）

ｒａｂｂｉｔ．ｃｏｍ　第３話

「何かおかしいと思ったんだ、宇佐美先生は。
教師のニオイがしなかったもの。
でもまさか、あのことを調べに来ていたなんてね。
教頭も僕らに内緒でひどいよ。これじゃ何にも信用できやしない。」
まるで息継ぎを忘れたように稲葉は早口で捲し立てた。

「あのさ」

「うるさい、しゃべるな。
そうか、あんたよそ者なんだ。それじゃ追い出せば済む話だ。
警察じゃないんだもんな。よしわかった。
ぼくが何とかする。何とかするからね、前園先生。」

自分に言い聞かせるようにしゃべりまくる。
けれどその目は何かに怯えた小動物のように焦点が合っていなかった。

「先生。」
「うるさいって。」
「あのね。」
「だまれ。」

「痛っっ！」

「えっ！ごめん！」

はじかれたように飛びのいて稲葉は尻餅をついた。

「ほらやっぱりだ。そんな慣れないことしちゃダメだよ先生。」

宇佐美はゆっくり立ち上がった。

「・・・・あっ、このやろう、だましたな！」

「だましたな、じゃねえよバカ。オレが訴えたらあんた捕まるよ？」

「・・・・・・・・」

「いや、そんなことしないけどさ。」

宇佐美が手を差し出してきたが、稲葉は無視して自分で立ち上がった。

「稲葉先生は誰をかばってるの？」

「かばってなんかないよ。」

「前園先生か？」

「何で分かった！？」

「あんたバカだろ。」

「誰がバカだよ！あの人は悪くないんだ。全然悪くない！」

「あたりまえだ。悪くなんかないよ。何もしてないんだから。」

「・・・え？」

稲葉は驚いた様子で宇佐美を見つめた。

「でも、清田先生とあの朝、口論してたの見ちゃったし、
昼間何か分からない薬を前園先生が清田先生に渡すの見ちゃったし、
亡くなってから酷く暗いし。」

宇佐美は右手で髪をクシャッとかき上げてため息をついた。

「だから推測で突っ走るのやめてくれる？
警察だってそんなことはとっくに調べてるさ。交友関係からすべて。
口論してたんじゃない。
清田先生のコンタクトを前園先生が踏んじゃってちょっと騒いでたんだ。
薬は胃腸の薬。ちょうど良い薬があると言って校医の前園先生が清田先生に渡したってだけの話。
それは飲まずに薬箱にそのまま入っていた。
医者の薬を持ってるのを前園先生は知らずに好意で渡したんだ。
そもそも清田先生の体内から見つかったのは
校医が簡単に手に入れられる種類の物じゃない。
薬学部にいた清田先生なら分からないけど。」

「そ、そうなんだ、やっぱり自殺なんじゃないか。あああ、もうバカだなーーーーおれ。」

「だからバカだって言ったじゃない。」

「じゃあ、やっぱり自殺の理由を調べにきたのかい？」

「ん・・・・まあね。」

曖昧に笑って宇佐美はさっき鍵のかかっていた引き出しを調べ始めた。

「用務員さん帰っちゃったから開かないんじゃないの？」
「うん。」
「中に何か入ってるの？」
「分からない。」

「警察は忙しいから自殺の動機なんてドラマみたいに調べないもんね。
鍵かけてるってことはさあ、何かあるよ。日記なんか出てきたりして。」
「ちょっと黙っててくれる？」
「・・・・・。」

宇佐美はさっきのプリントに書かれてあった構造式をじっと見つめた。
稲葉ものぞき込む。

「なに？何かわかった？」
「いや、・・・たださぁ。」
「何？」
「知るのが辛くなっちゃった。」
「？」

宇佐美は一番上の引き出しから細い針金を取り出すと器用に折り曲げ、
一番下の引き出しの鍵穴にゆっくりと差し込んだ。

「え～～っ？」稲葉が叫んだ。
「ちょっと、うるさいよ。」
「あんたピッキングなんてするんだ～～。初めて見た。」

宇佐美がその引き出しをゆっくり引くとスルスルとそれは開いた。

「やったね、宇佐美先生。」少し興奮気味の稲葉。

中から出てきたのは数枚の植物の写真と乾燥してしまった葉っぱ。

そしてプラケースに入った小さな種だった。
あとは薬局で処方されるような薬のパッケージと、それを閉じる封入機。
それらを見た宇佐美の顔は明らかに落胆していた。

「何なんですか？それ。」

「マチンの葉と種です。」

稲葉は子供のようにじっと宇佐美の目を見つめて説明を待った。

「・・・マチンの木を手に入れちゃったんですね。清田先生は。自分で生合成してみたくなったんだな。そして作ってしまった。ストリキニーネを。」

「なんですか？それ。」

「アルカロイド系の毒物です。
理解できないかもしれないけど彼はただ生合成の過程を楽しんでたんだ。
自殺のためなんかじゃなく・・。
本当に死にたかったら種を飲めばいいんだから。」

稲葉は宇佐美をじっと見つめた。

「明日、全てがわかるかもしれない。」

宇佐美も稲葉を見て小さく息を吐いた。

「俺の考えが違っていてくれたらと思うよ。今回は。」

稲葉はまだポカンとした表情で宇佐美を見ていた。

「・・・・ねえ、宇佐美先生？」

「え？」

「ここ・・・どうしたんです？」

稲葉は宇佐美の襟元を指さした。

宇佐美が自分の首を手で触るとヌルリとした嫌な感触。

首筋は血で真っ赤になっていた。

「どうしたんですかって、・・・あんたがさっきやったんだよ。ナイフで。」

「ええええええ～～～～～っ！！」

真っ青になって倒れそうになった稲葉を逆に支えながら

何だかガッカリな気分になっていた宇佐美だった。

（つづく）

ｒａｂｂｉｔ．ｃｏｍ　第４話

次の日の放課後。

きれいな夕焼けのオレンジの光が生物室の窓から入り込み
スーツ姿のすらりとした二人の男を照らしている。

「やっぱり宇佐美先生の言うとおりでした。
前園先生はあの日の日の朝、清田先生のハードコンタクトを踏んで壊し
ちゃったんですって。
清田先生はすごい近眼だけどメガネが合わないので
そのコンタクトを無くすとすごく不便だったろうって。
・・・前園先生今でも気に病んでるみたいです。」

「そう言うわけであの日、清田先生の視力は裸眼で０．０１。
もちろん家に帰ってからもね。スペアは持ってなかったらしい。
そして不運にも胃腸炎にかかっていた。」

まだ質問したげに顔を近づけてくる稲葉に向かって
指を口にあて”静かにして”のジェスチャーをする宇佐美。

後ろの戸がスッとスライドして高見カオルが顔をのぞかせた。

「呼びましたか？先生。」
「うん、ごめんね、何度も。」

カオルを見つめて宇佐美は優しく微笑んだ。

「あれ？稲葉先生も居るけど、いいんですか？」

「しかたないんだよ。」
「君たちねぇ・・・・・まぁ、いいや。」
稲葉は少しむくれていたが、そこからは口を挟まなかった。
宇佐美が今までとまるで違う優しい表情で高見に質問していくのをただ見つめていた。

「高見さんはなぜ清田先生が胃腸炎だったのを知ってたの？」
「亡くなる少し前にこの部屋で部活の前に薬を飲んでるのを見ましたから。
私、部長だったから一番に来て準備してたから知ってたんです。
小さな薬箱に沢山入ってたので、何の薬か聞いたんです。
気苦労が多いから胃腸炎になっちゃったって・・・笑ってました。」
カオルはすっかり宇佐美に警戒心を解いたらしく、淀みなくしゃべった。

「こんなパッケージだった？」
宇佐美は小さな粉薬の包みを高見に見せた。

「そうです。そんなのがいっぱい。」
「君、その包みに触ったことがある？」
「えーと、下に落ちていたのを拾って箱に入れてあげたことはありますよ。」
「下に？」
「机の下の方です。」

宇佐美はじっと静かにカオルを見つめた。
稲葉も何も言わず、二人をかわるがわる見た。

「それがどうかしたんですか？」
カオルが不安そうにたずねる。
「いや、何でもないよ。ありがとう。ごめんね、呼び出して。
もう帰っていいよ。」
「え？」
思わず声を出した稲葉を目で制して宇佐美は高見に優しく言った。
「この事は内緒にしてね、高見さん。」
「はい、わかってます。・・・・・あの、先生。」
「何？」
「もうしばらく先生でいてくれますよね。お仕事が終わっても。」
カオルは少し心配そうに宇佐美を見つめた。
「うん、後任の先生が見つかるまでね。」
「良かった。じゃあ、また明日。」
嬉しそうに手を振り部屋を出ていくカオル。
けれど見送る二人はもう笑っていなかった。
「あの子が混ぜちゃったんですね。」稲葉の声も沈んでいた。
「あの子に罪はないよ。」宇佐美はまだ出口を見つめたまま言った。
「いくらパッケージが似てたって味とかで気づかないもんなんです

か？」

「ストリキニーネは普通は苦くて飲めたもんじゃない。
でも清田先生はいつも全てカプセルに移してから飲んでたんだ。
粉薬が苦手だったんだろうね。そしてコンタクトの無かったあの日、
詰め替える薬の微妙な形状にも気が付かなかったんだろう。」

稲葉はまだ廊下を見つめたままの宇佐美の横顔を見つめた。

「・・・このまま終わらせちゃっていいんですか？」

「いいんだよ。事実を知ったって誰も幸せになんかならないでしょ？」

「・・・・・・そりゃ、そうだ。」

「オレの仕事はここまで。あとはクライアントに適当に報告するのみ。」

「自殺だったことにして？」

「そうだね。」

「いい加減な探偵だな。」

二人はお互い見つめ合って笑った。

「じゃ、明日からまた生物教師にもどります。」

「え？本当に先生つづけるの？」
「バイトですよ。事務所にずっといると身の危険を感じるんでね。」
「は？」
宇佐美は稲葉を見つめて少しあきらめたような表情で笑ってみせた。

その夜は美しい満月の夜だった。
いつもネオンばかりを反射しているその黒いビルも
今日はその神秘的な丸い光を映し込んでいた。
「わぁ、珍しく綺麗に満月が見えるわよ、諒。なんだか血が騒ぐわ〜〜。」
李々子は大きな窓に張り付いて夜空をながめている。
ソファーに寝ころんで新聞を読んでいた宇佐美は少しゾッとして小さくつぶやいた。
「これ以上やめてくれよ。オオカミ女じゃあるまいし。」
くるりと振り返って李々子は踊るようにひらりとソファに近づいた。
宇佐美が読んでいた新聞をバサッと放り投げて、両手でその顔を包み込む。
一瞬身構える宇佐美に真っ赤な唇を近づけてニコッと笑った。
「そんなこと言うと食べちゃうわよ、ウサギさん。」

金縛りに合ったように固まった男と、余裕の笑みを浮かべる年上の女。

その時、緊迫した空気を破るようにドアのチャイムが鳴った。

「こんな時間にお客かしら。」

残念そうに玄関に向かう李々子。
ホッとして起きあがった宇佐美だったが、
しばらくして李々子と一緒に現れた男を見て驚いた。

「稲葉先生！」

学校とはまた違ったカジュアルな服装の稲葉が緊張した表情でそこに立っていた。

「来ちゃいました。」

「来ちゃいました・・・・って、何で？」

李々子が満面の笑みを浮かべて言った。

「うちに入りたいんですって。稲葉幸一さん。」

「は？」

「ぼくもここでバイトさせてください。学校が無い時間。
宇佐美先生の仕事に惚れちゃいました。
ダメって言っても帰りませんよ。もう決めちゃいましたから。」

「いや～、可愛いわ！どうしましょう、私。」

唖然として言葉を失った宇佐美と最上級にご機嫌な李々子。

そして胸おどらせて目を輝かせている少年のような稲葉・・・。

「私は卯月李々子。この人は・・・知ってるわよね、宇佐美諒。よろしくね、白ウサギちゃん。」

「白ウサギ？」

稲葉はキョトンとした顔で李々子を見つめる。

「イナバの白ウサギちゃん。私たちと同じウサギね。」

李々子は頭を抱え込んで絶句している宇佐美の腕に手を回してニッコリ微笑んだ。

「ようこそ、ラビット・ドット・コムへ。」

つづく（第1章、ＥＮＤ）

深夜０時の猫　第１話

時刻はもうすぐ夜の１０時を回ろうとしていた。
ビルの１３階のそのオフィスの中で、ゲーム機に顔をくっつけるように画面に見入っている二人。

「ほら、こうやって敵を倒して隠されたアイテムを探し出すとキャラが強くなっていくんですよ、李々子さん。」
「ふ～ん。そうなんだ。」
「ちゃんとゲームの中で時間が経過するからほったらかしにしとくとキャラが弱っちゃって大変。」
「ふ～ん、そうなんだ。それでシロちゃんはいつも持ち歩いてんのね。」

今やすっかり李々子に「シロちゃん」と呼ばれている稲葉とその彼が事務所に居るときは何かとぴったりくっついている李々子。
宇佐美はそんな二人をデスクに座ってボーッと見ていた。

ゲームの画面に釘付けになっている横顔を李々子は綺麗な花でも見るようにじーっと見つめている。
そして気づかれないようにそっと耳のあたりに顔を近づけた。

「・・・・・・」

唖然とそれを見ている宇佐美。
李々子の唇がさらに稲葉の首筋に近づいていく。

「李々子！」

突然の宇佐美の大声にびっくりして振り返る稲葉と“チッ”と軽く舌打ちする李々子。

「君たち二人とももう帰りなさいよ。一応営業時間は9時までなんだから。」

稲葉がメンバーに加わってからまだひと月。
宇佐美は教師のバイトを終え本業に戻ったが、稲葉は掛け持ちなので事務所にいるのは精々2〜3時間。それも資料整理ばかりだった。

「家に帰っても一人だし、いいでしょ？9時まで退屈な資料整理やったんだからちょっと遊ばせてくださいよ。
李々子さんだってまだ帰らないんでしょ？
あ、ボクね、てっきり李々子さんと宇佐美さんはここに一緒に住んでるんだと思ってたんですよ。違ったんですね。」

「当たり前だ！何で俺が李々子と住まなきゃなんないんだよ！」

声を荒げて怒鳴る宇佐美。
李々子はあからさまに頬を膨らませて抗議の視線を宇佐美に投げかけた。
微妙な空気が流れる。

「あ、いや、なんかごめんなさい。えーと、じゃあボクそろそろ帰ろうかな。」
少し慌て気味に立ち上がる稲葉。

そこへ来客を知らせるベルが鳴った。
顔を見合わせる宇佐美と李々子。

「またこの時間ね。」

「なんですか？」
李々子に聞く稲葉。

「バイク便よ、きっと。」
李々子はちょっと不機嫌そうにドアに向かって「どうぞ」と声をかけた。

入ってきたのは黒いつなぎに身を包んだ美しいバイク便の女だった。
ドアの近くに立っている李々子の前をスイと通り過ぎると
小さな小包を宇佐美のデスクの上にトンと置き、
慣れた手つきでペンと伝票を取り出して宇佐美ににっこり微笑んだ。

「サインお願いします。」

「今日も１０時だね。」

「１０時指定の荷物なんで、特別に残業です。」
そう言ってまたにっこり。

宇佐美はボールペンを手に取ったが、後ろから手を伸ばしてきた李々子がそれを取り上げた。
李々子はササッとそれにサインをし、「ご苦労様」と少し無愛想にバイク便の女に差し出した。

女は特に気にするでもなくチラリと李々子を見た後、「失礼します」と言って部屋を出ていった。

またもや部屋に微妙な空気。

帰るきっかけを失って稲葉は二人を交互に見た。

「え・・・と、それなんですか？毎日１０時に来るんですか？なんだろう。いやー、気になるな。」

なぜか下手な役者の台詞のように棒読みになっている。

「いいんだよ、それは。たぶんイタズラだと思うから。」

「いたずら？」

「差出人の名前も住所もデタラメだし。」

「あら諒、まだ分からないわよ？今日のを見てみましょうよ。」

李々子はその小さなダンボールの包みを開けてみた。

中から出てきたのは大きなジズソーパズルのピースが一つだけ。

直径６センチくらいの幼児用のような大きなピース。

まだ何が描かれているのかまるで分からない。

「角だわね。これで角は４つ全部揃ったってことね。」

李々子は宇佐美のデスクの引き出しを開けて今まで送られてきた３つのピースを順に机に並べた。

「へー、これが毎日一個づつ送られてくるんですか？

なんでボクに内緒なんですか。ゲームよりよっぽどおもしろいですよ。」

「別に依頼でもなんでもないからいいんだよ。」

宇佐美は面倒くさそうに言う。

「ねえシロちゃん、順番にピースの裏側の文字を読んでみてよ。」
「文字が書いてあるんですか？」
稲葉は一つずつめくってみた。そこにはボールペンの小さな文字。
一枚目・・・“僕を探しておくれ”
二枚目・・・“何で探してくれないんだよ”
三枚目・・・“探してくれないとスネちゃうよ”
「・・・なんだかバカっぽいですね。」
稲葉はちょっとがっかりしたようにピースを置いた。
「だろ？関わらない方がいいんだよ。」と宇佐美。
「ねえ、今日のは何て書いてあるの？シロちゃん。」
「えーとねェ。」
稲葉はさっきの４枚目のピースをひっくり返した。
“探さない気かい？いいよ。
９枚全部揃うまでに見つけてくれなかったら、そちらのウサギ一匹消しちゃうよ？”
今夜３度目の微妙な空気が部屋に漂った。

（つづく）

深夜0時の猫　第2話

すっかり探偵気取りでピースとにらめっこしていた稲葉を何とか家に帰して
事務所にはまた宇佐美と李々子二人だけになった。

「全部で9枚って事よね。残り5枚。五日以内に犯人を捜さなきゃ誰か消えるの？」
ソファに座ってる宇佐美を背もたれの後ろからのぞき込む李々子。

「犯人じゃないだろ。どっちかというと捜索願いじゃないのか？これ」
ほんの少し笑う宇佐美。

「だってちょっと脅迫っぽいもの。
“ラビット”でネット広告打ってるからウサギっていうのは私たちの事でしょ？
嫌な感じ。
ねえ、この絵にヒントがあるのかな。まだ紫の背景に黄色いボールみたいなのしか分からないけど。」

「もういいよ。依頼でもないモノに頭使わなくっても。他に探し物の仕事は沢山あるんだから。」

「だって嫌なんだもん。」

「何が？」

「私の大事なウサギさんがいなくなっちゃったら。」

宇佐美はチラリと李々子を見て少し呆れたようにまたクスリと笑った。

「本気にしてるのか？そんなイタズラ。心配性だな。
・・・分かったよ、稲葉にはしばらく来るなって言っておくよ。
どうせ毎日来て貰っても任せられる仕事は無いし、どうもあいつが来ると落ち着かないし。
ここでゲームばっかりされるくらいだったら・・・・・うわっ！」

いきなり李々子に後ろから羽交い締めにされてびっくりする宇佐美。

「何すんだよ李々子、苦しいって！」

それでも腕の力を緩めようとしない李々子。

「やめろってば！何だよ。稲葉のこと邪魔者扱いした訳じゃないってば。
お前が心配するから・・・・・。」

李々子はゆっくりと力を緩めたが、後ろから回した腕は外さなかった。

「・・・よくそれで探偵やってるわよね。」

小さな声でボソッと言う。

「何がだよ。俺は探偵なんかじゃないよ。何でも屋なんだよ。手を放せってば。」

「・・・・ほら、また見てる。」

「え？」

李々子はそのままの姿勢でまたボソッと言う。

「顔を上げずに目だけ正面のビルを見て。ほら、こっちを双眼鏡で見てる女がいるでしょ？」

宇佐美がゆっくりと視線を正面に移す。

「そう言われればそんな人影が見える。」

「時々見てるのよ。あっちもいつも二人。奥のソファに男がいつも寝っ転がってるの。」

「ん？なんでそんなことが分かるんだよ。」

「私、視力2．9なんだもん。」

「アフリカ原住民か？お前は。」

「ねえねえ、きっとのぞき趣味なのよ。もっと見せつけてやりましょうか。」

「バカか、お前は！」

力ずくで李々子をはねのけて宇佐美はブルッと身震いした。

「あ～あ、つまんないの。」むくれる李々子。

「くだらない事やってないでお前も早く帰れ。送ってなんかやらないぞ。」

「わかってるわよ。」

コートとバッグを持つと、まだ少しスネたような表情をしたままバンとドアを閉めて帰って行った。

ひとつため息をつく宇佐美。
そして何気なくもう一度」向かいのビルを見た。
さっきの部屋はもう電気が消えていた。
そのビルも近代的なガラス張りのビルだったので周りのネオンや看板を映し込んでいる。
まだ明かりのついている事務所が多かったので宇佐美と同じように自宅と兼ねて使用しているのかもしれない。

宇佐美はテーブルの上の４つのピースをもう一度チラリと見た後電気を消して自宅として使っている奥の部屋に引き揚げた。

「もう店じまいなのかなー。電気消えちゃった。」

暗闇の中で双眼鏡を手にした若い女が後ろのソファで寝そべっている男に話しかけた。

「今日は何だかいつもよりワクワクしちゃった。
あの新入りイケメン君も長いことといたしね。
また小包が届けられてたじゃない？あれが届くとみんな真剣な顔するよね。何なのかしらね。」

まるで独り言のように滑舌良く女はしゃべり続ける。

「でもやっぱりあの女、私が覗いてる事に気づいてるんだわ。気づいてて挑発してるのよ。憎らしいな〜。ねえ、こっちだって見せつけちゃいましょうよ。」

それまで大人しく寝っ転がって話を聞いていた男がムクリと体を起こした。

「あんまりいい趣味じゃないと思うけどなぁ、覗きは。」

「あら、向こうだって嫌がってないんだからいいのよ。楽しいでしょ？私の実況中継。仕事の疲れが飛ぶってこの前言ってたじゃない。」

「まあ、ちょっと面白いけど。でも女の子なんだしね。ほどほどにね。」

女は独特のトーンでしゃべっている同棲中の男をまじまじと見る。

「面白くない男ね。がっかり。」

女は少し冷ややかにいうと、溜息をついて双眼鏡を置いた。

（つづく）

深夜０時の猫　第３話

五日後のＡＭ１０：００。

すっかり不機嫌モードな顔をして稲葉は事務所のドアを開けた。
パソコンに向かっている宇佐美とマニキュアを塗っていた李々子が振り向く。

「あれ？稲葉くん、久しぶり。」と宇佐美。

「久しぶりじゃないですよ！ひどいじゃないですか宇佐美さん。
一週間休業だって言うから変だと思ってたんですよ。何でウソつくんですか。
おかしいと思って李々子さんにメールしたんですよ！」

宇佐美は李々子をチラッと見た。

「言っちゃったの？」

「言っちゃった。」李々子もテヘッと笑う。

「テヘッじゃないですよ。なんでのけ者にするんですか。ひどいですよ！」

「今日は学校は？」

「休校日なんです。今日はちゃんと仕事させてくださいよ。」

李々子はヒラリと稲葉の横に近づいた。

今日も胸の開いた大胆なニットドレス。アップにした髪が色っぽかった。
声を荒げていた稲葉は急に言葉を詰まらせた。
「ほら、大事なウサギさんが危ない目に遭ったら嫌だったから。ごめんね。
でもやっぱりシロちゃんがいないと寂しかったわ。」
「あ、はい・・・そ、そうでしょ？」
稲葉は目のやり場に困り視線を泳がせた。
「そ、そうだ、あの小包はどうなりました？まだ送られて来てるんですか？」
「ええ、もう8枚。ほら。」
李々子はパラパラとテーブルにピースを並べた。
組み合わせていくと背を丸め気味にしてこっちを見ている動物が浮かび上がる。
「猫かなあ。」と、稲葉。
「猫っぽいよね。」と、李々子。
「裏は何て書いてあるんですか？」
稲葉は順にひっくり返していく。
5枚目・・・“オッドアイのね”
6枚目・・・“グリーンなんだけど”
7枚目・・・“探してくれたらお礼するよ”

８枚目・・・“明日で最後だ、ウサギさん”

「・・・ねえ、どう思います？宇佐美さん。」

稲葉はまるで興味なさそうにパソコンに向かっている宇佐美に聞いた。

宇佐美は面倒くさそうに顔を上げた。

「いいんだって。時間の無駄だよ。」

「でも今夜が最終でしょ？なんか気になるじゃないですか。」

「気になんかならないよ。ほっとけって。」

「えーっ。面白くない人だな。」

「面白くない人とか言うな！！」

「だってこうもウサギウサギって言われると・・・あ、そうだ、ヤバイ！。」

稲葉は急にゴソゴソとカバンの中を探し始めた。

「どうしたの？シロちゃん。」

「いやね、ウサギが死にそうなんですよ。」

「は？」

宇佐美と李々子が同時に声を出した。

「あ、ごめんなさい、ちょっとタイムね。
ゲームキャラにエネルギー補給しないと消えちゃうんですよ。
特にこのボスウサギがもう今ヤバくってね。こいつが死んじゃうと終了。
今まで作り上げてきた王国がぜんぶ消えちゃってね・・・・あ。」

さすがの稲葉もその場のじっとりとした空気を感じ取った。

「で、今日そのボスウサギが死にそうなのね？１０日前に始めたそのゲームの。」
李々子が子供に話しかけるように少し笑いながら稲葉に言う。

「そのゲームの話、誰か他に話した？」
宇佐美が聞いた。

「えーと、李々子さんでしょ？あと学校の生徒と先生と、あ、そうそう。
ここの一階のね・・・・」

そう言いかけた時軽いノックとともに「失礼しまーす」という元気な声。
黄色いエプロンをした小柄な女性がトレーにコーヒーを乗せて入ってきた。

「あ、このコですよ。一階のコーヒーショップの子。
・・・なんでここにいるの？」

女の子も稲葉を見て笑顔になった。

「あれ？ここの方だったんですか？
私、毎日この時間にコーヒー届けてるんですよ。
先日はいっぱいゲームの話出来て楽しかったです！」

李々子があきれた声を出した。

「な～んだ、ナオちゃんとシロちゃんはもうゲーム友達になっちゃってたの？ふーん。」
「ナオちゃんていうんだ。またコーヒー飲みに行くよ。あの面白いマスターにもよろしくね。」
「はーい。」

急に和やかになってしまった事務所。
けれど宇佐美はようやく少し考える体制に入ったらしい。

「・・・そうか。でもナオちゃんは関係ないしね。」

宇佐美はピースを見ながらぼんやりつぶやいた。
今日届くはずのピースはきっとその動物の顔になる。

「あれ？それ見たことありますよ？」
3人は一斉にナオを見た。

「え？どこで？」詰め寄る稲葉。

「う～ん、どこかのパーラーか何かのマスコットじゃなかったかな？見たことないですか？カラーの電光掲示版の広告に夜遅くに出てくるんです。
ここのビルの横にもあるでしょ？」

「・・・ああ、そうか、なるほどね。」
久々にすっきりしたといった声を出した宇佐美。
それ以上何も言わない。でも少しだけ嬉しそうだ。
「何か分かったんですか？宇佐美さん。」
稲葉は身を乗り出した。
「まあ、ほんの少しね。」
李々子がちょっと意地悪っぽく宇佐美の耳元でつぶやく。
「なによ、ちゃんとした依頼じゃないモノには興味ないんでしょ？」
「ないですよ？全然。」
宇佐美は何食わぬ顔でまたパソコンに向かった。

（つづく）

深夜０時の猫　第４話

時刻は夜の１０時。

バイク便の女はやはり李々子の前を素通りして宇佐美の前に小さな荷物と伝票を差し出した。

「ご苦労様。荷物も今夜で最後かな。」

「あら、そうなんですか？ちょっと残念。」

女はちょっと意味深に宇佐美に微笑んだ。

李々子は今日はもう伝票を奪い取らずに、腕組みをしてプッと頬を膨らます。

稲葉はそんな李々子をチラリと見て気が付かれないようにクスッと笑った。

まるで中学生みたいな反応が可愛らしく思えた。

バイク便の女が帰っていくと稲葉は急いでその包みを開けてみた。

中から出てきたピースにはまたもやボールペンの文字。

“深夜０時の猫より”

そして８つのピースの中央にそのピースをはめ込んでみた。

ブルーとグリーンのオッドアイの猫の完成だ。

稲葉はじーっと暫くそれを眺めていたが、あきらめたように宇佐美を見た。

「で・・・、これから何が分かるんですか？」

「たぶん０時になったら現れて教えてくれると思うよ。」

「猫がですか？」
「そう。でももう遅いし遊びに付き合ってないで二人とも帰りなさいよ。」
「嫌ですよ。ゲームは始めたらやり遂げるタイプなんです。」
「はーい！私も残るわ。気になるもの。ねえ、シャワー浴びてきてもいい？」
「馬鹿か、お前は！」

宇佐美に一喝された李々子だが、結局稲葉と例のゲームをやりながら０時を待った。

そして深夜０時ＪＵＳＴ。

眠そうにあくびをする李々子。

ドアをじっと見ている稲葉。

そしてチラリと窓の外を見た宇佐美が沈黙を破った。

「李々子、大きな紙かして。」
「ふぁ～～い。」

眠そうに李々子が古い大判のカレンダーを一枚持ってくると
宇佐美はその裏に太く大きく『ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ』と書いた。

ポカンと見つめる稲葉。
宇佐美はその文字を外側に向けてガラス窓にバンと貼り付けた。

「何やってるんですか？宇佐美さん。」

「猫が教えてくれたからね。もうすぐ電話かかって来ると思うよ。」

「え？」

間を入れず電話のコール。

「ええっ？」

紙をくしゃくしゃっと丸めて電話に近づきながら、宇佐美は向かいのビルを指さした。

息を呑む稲葉。

ビルの上半分にあのパズルそっくりのオッドアイの猫が映し出されていた。

こちらのビルの隣にある電光掲示板の広告がちょうど向かいのビルに映り込んでいるのだ。

「グリーンの方の目の部屋だよ。」

宇佐美はそう言うと電話のスピーカーホンのボタンを押した。

稲葉はそのグリーンの左目に当たる部分を目を凝らして見つめた。

女性らしい人影が立っているのが見える。

「あれ？あの部屋じゃないの」

李々子が眠そうな声でポツリと言う。

「・・・ああ、やっと見つけてくれたんですね。遅かったじゃないですか」

スピーカーホンにした電話から間延びした男の声。けれど美声だ。
宇佐美は少しうっとおしそうに答える。

「やめてくれませんか、こういう遊びは。
うちの広告見て思いついたのかもしれないけど。それで覗いてたんですか？」

「ごめんなさいね、覗きは彼女の趣味でしてね。
偶然そちらのイケメン君が僕の開発したゲームをやり始めるのを発見しちゃいましてね。
思いついたんですよ。」

「ゲーム？」
稲葉は思わず手元のゲーム機を見た。

「ゲーム開発しててもね、実際にその反響を実感できなくて物足りないんです。
自分の仕掛けたものにダイレクトに反応するのが見たかったんです。
毎夜１０時に何も知らない彼女がお宅らの様子を逐一報告してくれてワクワクしたな～。
でも今ひとつスリルが足りなかった。
次はもっとひねったのを送ろうかな。」

「いいかげんにしてくださいよ。遊びの相手なら他を当たってください」
ムッとして電話を切ろうとする宇佐美。

「あ、ちょっと待って。付き合ってくれたお礼するから。
今日の小包のパッケージの底、見てみてよ」
稲葉はゴミ箱に捨てられていたそれを拾い、中を注意深く探ってみた。
「あ、何だこれ。おおおおおお〜〜〜！これは！」
稲葉は小さなメモのような紙をひろげて目を輝かせた。
「なぁに？シロちゃん。」
「ウサギ大王復活のための裏コード！すげーーーー。」
がっくりうなだれる宇佐美。
「ゲーム開始から１０日足らずでよほどの達人でないと大王を死なせちゃうからね。
“消えちゃわなくて”良かったね、新入り君」
そこでブチッと電話を切る宇佐美。
「結局ウサギ大王の救出劇だったわけか？」
「えへ。」
照れ笑いする稲葉。
「えへ　じゃないよ」
「それにしても何だか楽しくなかったですか？謎解きみたいで。

へェ～、この時間にここから猫が見えるなんて知らなかったな」
稲葉はもうすっかり他の広告に変わっている向かいのビルをもう一度眺めた。

「俺もこの時間までこの部屋にいないから知らなかったよ。
この部屋から見える絵の角度まで調べてたってことだな。
そんなことまで調べてゲームを仕掛けてくるなんて暇な人間も・・・・・・
あれ？李々子は？」

宇佐美は急に静かになった李々子を探した。
そしてソファで丸くなっている李々子を見つけて慌てて叫んだ。

「寝るな、李々子！！」

ここで寝られたら大変だ。

「ふぁ～～い。・・・帰りまーーーす。」
ふらふらと立ち上がる。

「じゃ、リョウ、シロちゃん、おやすみなさ～～い」

「お、おやすみなさい」

わりと素直にふらふらと事務所を出ていく李々子を稲葉はちょっと心配そうに見送った。

「宇佐美さん、李々子さん眠そうですよ？ぼく逆方向だけど送りましょうか？

それか、ここに泊めてあげるとか」

宇佐美はブンブンと頭を振る。

「君は全然あいつの恐ろしさを分かってないな。気を付けないとひどい目に遭うよ」

「え？何でですか。かわいいじゃないですか。
まるで中学生みたいな反応するんですよ、時々。
宇佐美さんの事すごく好きなんですよ。ちょっと妬けちゃうな・・
なんて」

少し照れながら稲葉が笑っていると、いきなりバンと再びドアが開いた。

まだボーッとした顔のままの李々子。
フラフラとしながらも真っ直ぐ稲葉の方へ歩いてくる。

「え？」

そしていきなりガバッと稲葉に抱きつくと、その首筋に熱烈なｋｉｓｓ！！

声も出せずに硬直する稲葉と唖然とする宇佐美。

“しばらくお待ち下さい”
・・・のテロップでも流せそうな程の時間、静止画と化した3人。

そしてやんわり腕をほどいた李々子は満足そうにニッコリ微笑んだ。

「うん、目が覚めた。これで帰れるわ。ありがとうシロちゃん。それじゃあね。バイバイ～」

そう言ってスッキリした顔をして李々子は部屋を出ていった。

残された二人はゆっくりと顔を似合わせた。

「な？　わかったろ？」

「・・・・・はい、何となく」

哀れ首筋にルージュを残されたまま、稲葉は力なくつぶやいた。

（つづく『深夜０時の猫』・完）

0．03秒の悪魔　第1話

稲葉と李々子は二人がけの小さなソファに窮屈に座りながらそっとその小さな部屋を見渡した。

依頼人の話を聞くためにその自宅に行くというのは初めての事なので稲葉は少し緊張した様子だったが、李々子はいつまでも待たせる依頼人に
少し腹を立てなが部屋をキョロキョロしていた。

「ねえねえ、脳神経外科の先生だっていうから豪邸を想像してたのにワンルームマンションなのね。儲かってないのかしら。」

李々子は左手を稲葉の膝にのせ、体を寄せてきた。
まだ梅雨が明けたばかりだというのに露出の多いノースリーブのワンピース。
稲葉はまたもや視線のやり場に困り、同時に少し情けなくなった。

「そんなこと言ったら失礼ですよ。それより・・・あの、李々子さん、ちょっとくっつきすぎな気がするんですが。」

「だってソファが小さいんだもん。」

クスクス笑いながら李々子は猫のように寄り添って来る。
フワリとしたいい香りに一瞬ドキッとしながらも稲葉はこの場にいつも助けてくれる宇佐美がいないことを激しく残念に思った。

ふいにドアが開き依頼人、笹倉が入ってきた。
慌てて立ち上がり、稲葉は名刺を差し出す。

「すみません、今日は所長の代理で来ました。」

「かまいませんよ。私も忙しい身なので本題から入らせてもらいます。」

笹倉は丸メガネを神経質そうに触りながら、やや薄い髪をひと撫でしてソファに座った。

「依頼と言うのは最近ニュースで取り上げられている突発性異常行動の事なんですよ。」

稲葉はハッとしたように笹倉を見た。

「あ、あの突然普通の穏やかな人が殺人鬼のようになるって言う？今朝テレビで見てビックリしたんですよ。どうしてなんでしょうね。」

この一週間の間にある一部の地域で現在までに7人の同じような異常行動を取る人が確認されている。
仲の良い友人や知人が何かをきっかけにいきなりその相手に殺意を持って
飛びかかって来るという信じられない事件だった。
いずれもかすり傷程度ですんでいるが双方の心の痛手が大きい。
やった方の人間に後で事情を聞いてもその瞬間の記憶はまるで残っていないというので何の対応策も取れないでいた。

笹倉は本題に入った。

「実はつい昨夜、私の叔父夫婦にその現象が起きましてね。
本当に仲の良い夫婦だったのでびっくりしました。
幸い叔母はたいした怪我ではなかったのですが、かなりなショックで。」

「そりゃそうですよ。分かります。・・・で、依頼というのは？」

「叔父夫婦に・・・いや、この街に何が起きているのか調べていただきたいんです。」

「えっ！？」

予想外に漠然とした依頼だったので思わず稲葉は声を出した。
李々子は口元に指を当てたままいぶかしげに笹倉を見ながら言った。

「マスコミも警察も水面下で調べてますよ？もう少し待ってみたらどうですか？」

笹倉はメガネの奥の少し冷たい目を李々子向けながらも穏やかな口調で言った。

「私は宇佐美に・・・いや失礼。宇佐美さんに調べてもらいたいんですよ。
他の誰でもなく、ね。」

「うちの宇佐美とお知り合いなんですか？」
稲葉は体を乗り出し早口に聞き返した。

「あれ？何も聞いてないんですか？心外だなあ。

私たちは同じ大学の同期なんですよ。同じ医学部のね。
そしてお互い大学院まで進んだのに卒業を待たずに彼は大学を辞めてしまった。
ものすごく優秀だったのに。」

笹倉は遠い日を思い出すような目をしたまま黙り込んでしまった。

李々子はグッと稲葉の手を掴んで立ち上がった。
稲葉も「え？」という顔をしたまま立ち上がる。

「ご依頼の内容はわかりました。帰って所長と検討します。失礼します。」

事務的に頭を下げて李々子は稲葉の手を引っ張った。

「あ、そうだ、ちょっと待ってください。
駅に行く途中に最近出来た大型ショッピングモール「ガイア」があるでしょう？
３階に友人がやってるエステ&リラクゼーションサロンがあってね、
私の名前を言うと無料になるんですよ。いつでもどうぞ。」

そう言って営業的な笑顔を二人に向けた。

笹倉の部屋を出てしばらくは無言で稲葉の前を早足に歩いていた李々子だが、
交差点を越えたあたりで急に歩幅を縮め、子供のように稲葉の腕を掴んで寄り添ってきた。

「わ、李々子さん？ここ人が多いからダメですって！ね？ね？」

「怖かった。」

「え？」

またいつもの様にふざけているんだと思っていた稲葉は少しおどろいて李々子を覗き込んだ。

「怖かったって、何が？」

「あの依頼人。」

「・・・笹倉さんのこと？」

「あの人、キライ。」

まるで子供の口調になっている李々子に驚いて稲葉は足を止めた。
そこはもう「ガイア」の入り口だった。

「・・・・ねェ、李々子さん。ちょっと寄り道して行きましょうか。宇佐美さんもまだきっと帰ってないでしょうし。ね？」

李々子は気遣うようにのぞき込む稲葉の目をじっと見つめていたがやがていつものようにニッコリと微笑んだ。

「いいわね！じゃ、私、一階にあるネールサロン寄っていくから！！上の階にシロちゃんの好きそうな大きなゲームショップあるわよ。シロちゃん、私よりも先に帰ったら諒に適当に言い訳しておいてよ

ね。
じゃ、バイバイ～！」
「は・・・・・・はい。」
猫の目の様にくるくると表情を変えていく李々子に圧倒されながら
稲葉は唖然としてその少し年上の女性を見送った。
まだまだ知らないところがいっぱいありそうだ。
李々子にしても・・・宇佐美にしても。
「優秀な医学生・・・かあ。」
稲葉はちょっと考え込んでいたが、やがて頭をガシガシっとかき乱
しながらエレベーターに向かった。

（つづく）

０．０３秒の悪魔　第２話

事務所のあるビルの裏通りを少し入った所、
人気の少ない地下倉庫の入り口で宇佐美は時計を見ながら壁に寄りかかっていた。

しばらくして彼に近づいて来たのは一見仕事帰りと言った感じの年上の女。
女は特に挨拶するでもなく、宇佐美の横に並んで同じように壁に寄りかかり
大きなバッグから紙の束と手帳を取り出してパラパラとめくり始めた。

「あいかわらず遅刻しても言い訳しないな、チカは。」

少し笑いながら宇佐美はその女、チカをチラリと見た。

「こんなところで待ち合わせするから時間が気になるんでしょ？
喫茶店とかならまだしも。」

「あまり喫茶店で情報屋と待ち合わせなんて聞かないだろ？
ま、いいや。・・・で、何か分かった？」

チカはバサリとこの街の地図を広げた。
地図にはくっきりと赤で道に沿ったラインが何本も引かれている。

「あの異常行動を起こした人たちの生活圏をラインにしてみたの。
近いでしょ？この街に何かあるのよ。」

「興味深いね。ありがとう。役に立ちそうだ。」

「苦労したんだからね。みんな口が重くてなかなか教えてくれない。」

「わかるよ。思い出したくもないはずだ。
原因なんてない、自然発生的なものなのかもしれないけど。
やっぱり気になってね。防げるものなら防ぎたい。」

チカは少しうつむいた宇佐美の目をチラリと見た。
そして持っていた資料をバサリとまとめてその手に渡すと少し柔らかい口調でつぶやいた。

「いつ辞めて逃げ出すんだろうと思ってたけど大丈夫だったね、ウサギさん。
卯月の旦那も喜んでるよ、きっと。まあがんばって。」

顔を上げた宇佐美と目が合うとチカはほんの一瞬だけ笑って見せたが、
すぐに向こうを向いて足早に歩いて行ってしまった。

相変わらずサパサパした人だ。
そう思いながら宇佐美はその影を見送った。

その時携帯に着信音。李々子からだった。

「諒、あの人来てるの！笹倉って人。ねェ、早く戻ってきて！」

少し潜めた緊張気味の声。

「わかった。すぐ戻るから。」

二日前に稲葉達が話を聞きに行ったばかりだというのに何の用だろう。

宇佐美は携帯をパタリと閉じた。

「やあ、久しぶり、宇佐美くん。１０年ぶりじゃないかな？

変わらないな君は。私はほら、かなり太ったよ。」

ドアを開けるなり窓の近くのソファに座っていた笹倉がにこやかに話しかけてきた。

李々子の姿を探すと、パーテーションの裏の給湯スペースで、なぜか喫茶鳳凰のナオと黙って立っていた。

「あれ？ナオちゃん、どうしたの？」

「李々子さんにコーヒー頼まれて・・・・。

でも帰っちゃ嫌だっていうもんだから。」

ナオはトレーを持ったまま困ったように笑った。

「ごめんねナオちゃん、諒が帰って来たからもういいわ。」

「まったく李々子さんたらゲンキンなんだから。」

ナオはわざと拗ねたように口を尖らせてみたが、すぐに笑いながら部屋を出ていった。

宇佐美はそこではじめて笹倉に向き直った。

「お久しぶりです。笹倉さん。」

「敬語はやめてくれよ。学友だろ？私たちは。」

「・・・依頼の件だったらまだ何もつかめてないよ。当事者であるあなたの叔父さんにも会わせてもらえなかったし。」

「ああ、二人とももう忘れたがっていてね。悪いね。他の線から何か解るかと思ったんだが。無理かな？医学においては天才的ひらめきを持っていた君でも分野が違うかい？おっと、今はこっちが本業だったね、失礼。」

「笹倉・・・。」

李々子は部屋の隅に立ったまま手を握りしめて二人を見ていた。

「解らないんだよね、私は。教授陣から高い評価を受けながらも突然大学を辞めてこんな探偵事務所で働き出した人間の思考が。准教授の椅子だって用意されていたんだぞ？信じられないよ。私がどれだけがんばっても手に入れられなかった物をどうしてそんなにあっさりと捨ててしまえるのか。理解不能だ。」

「笹倉。・・・・何を言いにきたんだ？」

宇佐美はゆっくりと笹倉の正面に座って手を組んだ。

「でも勝ったのは私だよ、宇佐美。
あの頃は私の研究が倫理的でないと事あるごとに注意してくれたけども。
教授陣はいつも君しか見てなかったけども。
今は仕事も地位も私の方が上だ。」

「ああ・・・・・。」

宇佐美はようやく飲み込めたと言うように笹倉を見た。

「そうだな。笹倉。勝負した覚えはないんだけど。」

そう言って穏やかに笑った。

その時突然ドアの“バン”と開く大きな音。

見ると李々子がドアを大きく開けたまま無言で立って笹倉を睨みつけている。
笹倉はフフンと笑うとゆっくり立ち上がった。

「帰れって事ですか？すばらしい社員教育だ。
どうやらこのお姉さんには嫌われてしまったみたいだね。
依頼の件は引き続きお願いしておきますよ。まあ、期待はしてない

けども。」
片方の唇だけ上げて笑うと笹倉は李々子の横を通り過ぎゆっくり出ていった。
李々子は勢いよくドアを閉めるとガチャリとカギをかけた。
「あれ？カギかけたらだめでしょ、李々子さん。稲葉くん、入れなくなるけど、いいかな？」
からかうような宇佐美の口調に李々子はちょっと不機嫌そうに頬を膨らませたまま、後ろ手にガチャリとカギを開けた。

「脳科学・・・・ですか？」
途中参加の稲葉も加わり、３人はテーブルの上の資料を見ながら考えをまとめる作業に入った。
けれど自然と話は笹倉の話に移行していく。
「そう。精神物理学とも言われる分野に彼は足を踏み入れて人間を科学しようとしはじめた。
神経の機能をコンピューターで再現する神経科学はもうすでに研究され初めていたんだけど彼の研究は度を越えていてね。
倫理的な部分を俺が責めたこともある。
無言の圧力によって彼はしだいに研究室を追われる形になったからその部分でも俺を恨んでるのかもしれないな。」
「根に持つタイプなんですね。やだなー、そういう奴。

でも今は脳神経外科のドクターなんでしょ？順風満帆じゃないですか。」

稲葉はちょっと癪だというように口を尖らせた。

「今はドクターじゃないらしいよ。」

「え？」

「たまたまその病院に知人がいてね。
笹倉はトラブルメーカーだったらしく、半年前に辞めたと聞いている。」

「じゃあ、何をもってあの人は自分の勝ちだって言ったんだろう。」

稲葉は真っ直ぐな目で宇佐美を見た。

「ねえ、もういいじゃないの。あの男の話は～。お仕事しましょうよ。」

李々子は少し退屈したように情報屋の持ってきた資料をポンと指ではじいた。

「了解。同類の依頼が3件も来てるからね。」

宇佐美は赤いラインの書き込まれている地図をバサッとテーブルに広げた。
稲葉が食い入るようにそれに顔を近づける。

「例の症状を起こした人の移動ルート、すごく似てますね。
必ずこの桜木駅と“ガイア”を通ってる。偶然でしょうか。」

「この事件が起きているのが日本でここだけ。そしてこの街だけだ。
こんな偶然はありえないよね。」

「私も駅かガイアが怪しいと思う。他に共通点見あたらないもの。」

「でも何が怪しいんですか？」稲葉は李々子をチラリと見た。

「バカねー！それを調べるんでしょ？」

「バ、バカって・・・・。」稲葉はちょっと傷ついたように絶句。

「諒、私このあたりに何かヒントになる物がないか見てくる。
ここで考えてても始まらないでしょ？」

「じゃ、俺もいっしょに行くよ、」

「えっ。」

「えっ、て何だよ。」

「う～ん、じゃあシロちゃんと一緒に行く。諒は寄り道させてくん
ないもん。」

「何だよお前達はいっつも寄り道して遊んでたのか？」

「え・・と・・・。」

李々子は視線を泳がせて曖昧に笑って見せた。

「ねえ、シロちゃん、一緒に行ってくれるでしょ？
・・・・・・あれ？シロちゃん？どこいっちゃった？」

李々子は急に消えた稲葉をキョロキョロして捜した。

給湯室の方からカチャリと微かに金属音。
何気なくそちらを振り向く李々子。
けれど次の瞬間李々子は聞き取れないくらいの小さな悲鳴を上げた。

ゆっくりとパーテーションの影から出てきた稲葉の表情は明らかにいつもの彼ではなかった。
そしてその手にはまだ新しい果物ナイフがしっかりと握られている。

その人形のようにトロンとした目と鋭い刃先は確実に宇佐美に向けられていた。

（つづく）

０．０３秒の悪魔　第３話

「シロちゃん！？・・・どうしたの？　ねえ。ナイフ・・・・危ないよ？」

稲葉に李々子の声が届いていないのはすぐにわかった。
ちらりとも視線を外さずに宇佐美を真っ直ぐ見つめている。
その表情には何の感情も現れていなかった。
ただ何かに取り付かれたように少しずつ宇佐美に近づいていく。

「稲葉にナイフ向けられるの、２回目だな。」

「ジョーダン言ってないで逃げてよ！シロちゃんおかしいって！」

「逃げろって言われても・・・。」

宇佐美は一、二歩窓際に体を退いた。

けれどもそれを合図にしたかのように稲葉はナイフをしっかりと握ったまま宇佐美に襲いかかってきた。

“バシン”という大きな音。

宇佐美が身を翻した所に稲葉が倒れ込んできた。そして李々子も。
李々子が稲葉に体当たりしてきたのだ。
持っていたナイフはその弾みで部屋の隅にはじき飛ばされ、
倒れたとき打ったのか稲葉は頭を抱え込んで動かなくなった。

李々子は稲葉の上に乗ったまま宇佐美を見上げた。

「ねえ・・・これって。」

宇佐美はゆっくりとしゃがみ込むと目を閉じたまま動かない稲葉をじっとのぞき込んだ。

「うん、同じだ。」

「どうして？ねえ、何でシロちゃんまでなっちゃうの??」

李々子は身を乗り出すようにして宇佐美に詰め寄った。

けれどそれも稲葉の体の上。

やがて「んん・・・」と小さく呻いて稲葉は目を開けた。

「り・・・李々子さん・・・。」

「シロちゃん！」

「・・・重いです。どいてください！」

「あ、ごめんね。」慌てて李々子は稲葉の体から飛び降りる。

宇佐美は床の上に体を起こして座り込んだ稲葉に静かに話しかけた。

「稲葉。今自分がやった行動を覚えてる？」

「やったって・・・僕何かやらかしました？」

稲葉は少しボーッとしたまま、無言で自分を見つめる二人を代わるがわる見た。
そして、部屋の隅に不自然に転がっているナイフを見つけた。
「・・・いやだな二人とも。・・・ウソでしょ？
ボク、何もしてないですよね？　ね？」
李々子はゆっくり稲葉の横にしゃがみ込んで小さい子に言うように話しかけた。
「大丈夫。だれも怪我しなかったから。ね。」
稲葉は絶句したまま血の気の失せた顔で二人を見た。何か言おうとするがショックが大きくて言葉が出てこない。
「それはいいんだ。君のせいじゃない。
重要なのは俺たちに必要なカギを君が持っていると言うことだ、稲葉くん。」
宇佐美は稲葉の目をのぞき込んだ。
「カギ？」
「よく思い出して。君にこの数日間の間に起こった出来事を。
なにか変わった事はなかった？あるいは妙な物に触れたとか口にしたとか。
場所に関してはどう？あの地図を思い出して、重なるところはない？」
「重なるところ・・・・。ガイア・・・だ。

ボクはあの駅には行ってないから重なる所はガイアしかないよ。」
「よし。じゃあ、ガイアに入ってからの行動を全て思い出してみて。」
稲葉は斜め上に視線を向けて必死にその日を思い出していた。
「3階にこの辺ではかなり大きなゲームショップがあるんです。
だから真っ直ぐエレベーターで3階に上がって・・・。
エレベーターを降りたところがすぐショップだったんで他の場所は見てません。
そこで20分くらいウロウロして・・・。
でもやっぱり油売ってる場合じゃないって思ったんでまたエレベーターに乗ろうとして・・・。あ、そうだ。
そしたら笹倉さんの言ってたお店がすぐ横にあったんでちょっとその前を通ってみたんです。」
「笹倉に？何て言われた？」
「無料になるから暇なら行ってみてって。もちろんエステとか全然興味なかったんで入りませんでしたけど。
お店の前に大きなモニターがあってそのお店のCMしてたんでほんの少し見て・・・で、そのあとは・・・・」
「！」
宇佐美はいきなり立ち上がってアドレス帳をめくり電話をかけ始めた。
李々子が飛びつくように電話のスピーカーホンを押す。

コールが途切れると宇佐美が話し出すよりも先に落ち着き払ったあの声が聞こえてきた。

「何か面白いことでも起こったかい？宇佐美くん」

「まさか、あんたなのか？笹倉」

「まさかって？」笑い声が混ざる。

「他に誰がこんな事できる？自然発生したとでも思ったかい？」

「ちゃんと答えろ！」

「フン。いいね。だんだん君らしくなってきた。
さあ、もう解ってるんだろ？君には。電話をかけてきたところを見ると」

「サブリミナル・・・」

電話の向こうで甲高い笑い声。

「半分正解。
さて、偽科学と言われたサブリミナルでどうやって人を操れるのでしょう。
シンキングタイムだ、宇佐美くん」

からかうような口調でカウントを取り始める笹倉。
じっと聞いていた稲葉は拳を握りしめて今にも電話機をたたき壊しそうな顔つきになっていた。
「あんた・・・見つけたのか？第二の知覚野を」
「ご名答。
だから私が作った映像をどんなに捜査員が解析したって何の証拠も出てこない。
私は見つけたんだよ。
大脳皮質視野が感知できる閾値を下回る０．０３秒の信号を認識し、どの伝導路よりも素早く伝わる未知なる知覚野をね。
今までの子供だましのサブリミナルとは似て非なるもの。
映像に混在するのは映像ではなく、直にシナプスに伝達する電気信号なんだ。
組み立てられるのも解析できるのもこの世に私しかいない。警察は犯罪の裏付けさえできない。
つまり、完全犯罪だよ、宇佐美くん」
宇佐美はちらりと稲葉を見た。
稲葉は大きく頷くと素早く携帯を取り出しガイアの管理事務局にダイアルした。
スピーカーからはまだあの勝ち誇ったような笑いが続いている。
「もうひとつ言っておかないとね。
君は私の研究のテーマがおかしいと指摘したけれどやはり間違ってなかったよ。

証明されただろ？
人間は機械と同じなんだよ。神が作った精巧な玩具。
信号でどうにでも操れるロボットなんだよ。
なあ、そうだろう？宇佐美」

宇佐美は静かに話しかけた。

「笹倉。残念だよ。その頭脳をそんなふうに使うなんて」

「負け惜しみにしか聞こえないね。どう使おうと私の勝手だ。
・・・そうだ、教えてあげようか？
何をきっかけに信号を受け取った人間が変貌するのか」

電話の途中の稲葉も少し青ざめて聞いていた李々子もじっとその言葉に集中した。

「その映像を見た後に最初に聞いた言葉さ。
本人が忘れていてもそれと同じ言葉をどこかで聞くとそれを言った人間に殺意が沸くようにプログラムされている。
どう？面白いでしょ？
その言葉と同じ言葉を、誰が、いつ言うのか。
翌日か、半年後か、１０年後か。わくわくするね。
時限爆弾を持った人間がこの街にどれくらい居るんだろうね」

「笹倉！！」

けれど耳障りな笑いを残してそのまま電話は切れた。

「宇佐美さん、ダメだ！」

携帯を掴んだまま稲葉が泣きそうな顔で飛んできた。

「電話じゃ信用してもらえないんです。あんた誰だとか言って。ボクすぐにガイアに言ってモニターぶっ壊してきます！」

「バカ、君が捕まるよ。俺が行く。そして警察だ。とりあえず笹倉を野放しにはしていられないからな」

そう言って宇佐美はさっきの会話の録音テープを電話機から抜き取った。

「李々子、お前は笹倉の自宅を・・・・・」

宇佐美は先程からやけに大人しい李々子を振り返って言葉を詰まらせた。

顔が真っ青だった。手で口を押さえたまま何かに怯えたように立ちすくんでいる。

「李々子？　どうした。気分でも悪いのか？」

李々子はゆっくりと視線を宇佐美に合わせると小さな声でつぶやいた。

「どうしよう・・・私も見ちゃったの。あのモニター」

（つづく）

０．０３秒の悪魔　第４話

「え？だって李々子さん、いっしょに来なかったでしょ？」

李々子はこくんと小さく頷いた。

「でもネイルサロン行った後ね、まだシロちゃんがいるかと思って３階に行ってみたのよ。
エレベーター降りたらすごく目立って見えるところにあったから・・・つい。」

「李々子。」

宇佐美の声に李々子は不安そうに振り向いた。

「覚えてるのか？そのモニターを見た後に最初に聞いた言葉を。」

李々子は首を横に振った。

「でもその言葉はわかる。この中にはいってるの。」

そう言って李々子は自分の携帯を取り出した。

「携帯に？どうして。」

「モニターをボーッと見てたら電話の着信に気付かなかったらしくって
留守録にメッセージが入ってたの。
だから・・・それを聞いた。」

「誰から？」

「飲み友達の社長から。昼間っから酔っぱらってふざけてかけてきたみたい。」

「ああ、あのタコ社長ね。・・・貸して、携帯。」

「どうして？」

「聞くから。」

「どうしてよ。」

「いいから貸して！」

李々子は少し戸惑いながら持っていた携帯を宇佐美に渡した。
いつになく真剣な目でやり取りする二人を稲葉はただじっと見ていた。

「ねえ、諒、どうするの？」

宇佐美は留守録の再生ボタンを押して携帯を耳に当てる。

ほんの少しの沈黙。

しばらく静かに聞いていた宇佐美は急にくっくっと笑い出した。

「どうしようもない酔っぱらいだな。・・・よりによってこのセリフかよ。」

そう言ってパタンと携帯を閉じた。
宇佐美は携帯をデスクに置くとゆっくり李々子に近づいて向かい合った。
李々子も宇佐美を見上げる。

「何する気？」

「最初の言葉を今、君に言う。」

「・・・・・」

李々子は2、3歩後ろに下がった。

「やめてよ・・・。イヤよ、絶対にイヤ！」

「大丈夫だって。他の場所で聞いたらもっと怖い事になるよ？」

「だって・・・。」

李々子はチラリと助けを求めるように稲葉を見た。
けれど稲葉はどうすることも出来ずに立ちすくんでいた。

「だって私、何するかわからないのよ？」

「俺は大丈夫だから。稲葉だっているしね。」

「・・・・・。」

李々子は少し怯えた目で宇佐美をじっと見上げると、小さく頷いた。

宇佐美はホッとしたように笑った後、もう一度李々子に向き直った。

一瞬の沈黙。

そして宇佐美はゆっくりその言葉を言った。

「愛してるよ、李々子。」

李々子の瞳が大きく見開かれた。明らかに何かに反応している。

宇佐美はじっとその目をみつめていた。

李々子の両腕が微かに振るえながらゆっくり宇佐美の方へのびていく。

綺麗な細い指がその首に触れた。

それでも宇佐美はじっと動かずに李々子を見つめている。

稲葉は呼吸するのも忘れ、その場に固まってただ見つめていた。

しっかりと李々子の両手は宇佐美の首を捉えた。

小刻みに震えている。
見開かれた目。
呼吸が乱れる。

その指先に力が入っていく。

宇佐美はほんの少し苦しそうに目を細める。

稲葉はハッとして体を身構えた。

けれど・・・。

李々子の手はそのままゆっくり宇佐美の背中にまわされ、

強く強くその体に抱きついた。

「ほら。　大丈夫だ、李々子。　よくやった。」

宇佐美は優しく笑ってその髪を撫でた。
李々子は抱きつくと言うよりしがみつくようにして宇佐美にくっついたまま震えている。

「怖かった・・・。」

「がんばったね。笹倉の暗示に勝ったんだよ、君は。
人間はロボットなんかじゃないんだ。」

李々子は宇佐美を見上げてポソッとつぶやいた。

「勝った？私あの男に勝ったの？」

「そう。君の勝ち。」

そう言ってニコッと笑ってみせた。

「宇佐美さん。」

稲葉は少し目を潤ませてホッとした顔で二人を見た。

「僕、行って来ます！負けたままじゃ終われませんからね。モニターぶっ壊してあの男を警察につき出してやりますから！」

そう言って録音テープを掴むと勢いよく部屋を飛び出していった。

「モニター壊しちゃダメだぞ～、稲葉～！」

きっと聞こえないだろうなと思いつつ宇佐美は少し笑いながら叫んだ。

「行っちゃったな。うさぎって言うよりイノシシだよあいつは。熱意だけは人一倍なんだけど。」

宇佐美はため息まじりにつぶやいた後李々子を見おろした。

「ねえ、もう離れてもらっていいかな？」

李々子は前よりももっと腕に力を入れてしがみついた。

「いや。」

宇佐美は困ったようにもう一つため息をついた。

数日後、笹倉は警察の事情聴取を受けたが事件との直接的な因果関係が証明されなかったためすぐに釈放となった。

けれどその夜、宇佐美の元に彼が例の症状を起こした知人に襲われ、病院に運ばれたという連絡が入った。

それから一ヶ月後。

「やっぱり神っているんですかね。」

夏休みに入り顔を出すことが多くなった稲葉が資料整理しながらポツリとつぶやいた。

「え？何？」

柄にもない稲葉の言葉に半笑いで宇佐美が振り向く。

「何の罪にも問われない笹倉にすっごくムカついてたけど、自分がその罠にはまったわけでしょ？
天は見てるんですね。」

「そうかもね。」

「それにしてもあれ以来その事件、起きませんね。何ででしょう。やっぱりみんな隠してるんでしょうか。」

「いや、もうたぶん大丈夫だと思う。」

「え？なんで？」

「人はロボットじゃないからね。忘れる生き物なんだよ。」

「・・・・あ、そうか。」

「潜在意識にしても時間に比例して薄れていく。暗示より自分を制御する力が勝っていくんだ。」

「そうですよね。ああ、そうかそうか・・・・・・あれ？でも、それだったら・・・・。」

稲葉はチラリとパソコンに向かっている李々子を見ながら宇佐美の耳元でつぶやいた。

「李々子さんにあの時あの言葉言わなくても良かったんじゃないですか？」

「そうかな。」

宇佐美はきょとんとして稲葉をみた。

「そうですよ。だって・・・・・言われませんよあのセリフは。」

「言われないかな。」

「言われないでしょ。」

「そうかぁ。」

「そうかぁ、じゃないでしょ！！」

ギクッとして二人が振り返るとすぐ近くで李々子が腕組みをして立っていた。

「え・・・、あ、聞こえてました？」慌てまくる稲葉。

「目だけじゃなくて耳もいいのよ私。」

李々子は腕組みしたまま次第に小さくなる稲葉を見おろしてニヤッと笑った。

「失礼よね。私だって捨てたもんじゃないのよ。

そうね～、先ずあの電話をかけてきた社長は一番に危なかったわね。」

ブッと吹き出すように宇佐美が笑い出した。

「ああ、ありえる。あの社長はあぶないね。」

「なるほど！」

稲葉もポンと手を叩いた。

「それにねぇ。」

李々子は笑っている宇佐美を見ながら少し表情を柔らかくしてポツリと言った。

「他の人だったら私、殺してたかもしれない。」

稲葉はハッとして李々子を見た。

宇佐美も笑うのをやめた。

そのほんの少しの沈黙に照れたように李々子はエヘと笑って時計を見た。

「3時だわ。よし、休憩ね。私“鳳凰”に行って来ま～～す。じゃあね！」

李々子はポーチを持つといつものように元気良く手を振って部屋を出ていった。

残された二人はゆっくり顔を見合わせてクスッと笑う。

「ねえ、宇佐美さん。・・・3時の休憩なんてあったんですか？」

「さあ。初めて聞いた。」

「ですよね？」

そう言って二人はもう一度小さく笑った。

つづく（『0．03秒の悪魔』

終）

稲葉くんの憂鬱　第1話

時刻は午前１０時２０分。
約束の時間から２０分過ぎている。
稲葉は少しソワソワしながら映画館の前で腕時計を何度も見た。

二日前の金曜日、やっと前園先生と映画を見る約束を取り付けた稲葉は
もうその日からずっと落ち着かなくてソワソワしっぱなしだった。
今日も約束の時間よりもずいぶん早く来てしまったために、
映画館の清掃員のおばさんにだんだん気の毒そうな視線を投げかけられ始めていた。

２０分くらい何でもないさ。女の人は時間がかかるんだ。
稲葉はひとつ深呼吸し、気持ちを落ち着かせようと彼女が来る反対方向に視線を向けた。

ひとりの男と目が合った。

と、いうよりその男がじっと異様な眼力で稲葉を見つめているので嫌でも目が吸い付けられてしまったのだ。
稲葉に視点を合わせたまま、その５０ぐらいの男は異様な足取りでじりじり近づいて来る。

思わず稲葉は回りを見回す。
しかしやはり男が見つめているのは稲葉だった。

ぼ、・・・ぼく？

丸坊主にした頭、浅黒い顔、目の下にはクマができ、ぎょろりとした目つきはかなり尋常ではない。
よく交番の掲示板に貼ってあるような形相の顔だった。

なんだ？なんで僕の方に来るんだ？
違うよな、僕じゃないよね。

けれど男はさらにフラフラと至近距離まで近づくと、持っていた紙袋を無造作に稲葉に差し出した。

やっぱり僕？？

「ほれ、受け取れ。約束のものだ。
まったくこんな人通りの多いとこまで来させやがって。
いいか？ボスに言っとけ。今度から金は前金でよこせってな！」

「え？あの、え？」

「いいからさっさと行けよ！ごちゃごちゃぬかすとぶっ殺すぞ！」

「は、はいっ！」

あまりにドスの利いた声と目つきで睨まれたので稲葉は何も言えずに紙袋を受け取り、数歩後ずさりする。
男はもう一度稲葉を睨むとまたフラフラと人混みに消えてしまった。

唖然として立ちすくむ稲葉。

間違えられたんだ・・・。誰かと間違えられたんだ！どうしよう、
返さなきゃ。

けれども男はもうすっかり人混みに消えて見えなくなってしまった。
たとえ居たとしても、もうさっきの男に「人違いですよ」などと言う勇気もなかった。

途方に暮れて稲葉はその小さな使い古した紙袋をじっと見つめた。
どうか大したものじゃありませんように。
そう願いながらのぞき込んだが中の物は新聞紙で乱雑にくるまれていて中身はよくわからない。

ぼくのせいじゃないよな。これは。

小さいくせにかなりズシリと重量感のあるその紙袋を稲葉は溜息混じりに目の前にかざした。

ハッと大事なことを思い出した。

前園先生。

時刻は１０時４０分。
あのきっちりした先生がいくらなんでも遅すぎだ。
携帯番号も渡してあったのにどうしたのだろう。
稲葉はショルダーバッグの中の携帯を探した。

・・・ない。　忘れた。

こんな大事な日に、どうして！？
稲葉は全身に嫌な汗をかきながら自分のバカさ加減を呪った。

これでは前園先生は連絡取りたくてもとれるはずもない。
今から自宅にもどっても小一時間かかる。
ダメだ、最悪だ。

稲葉はその場にうなだれた。
清掃のおばさんがさらに気の毒そうな視線を投げかけて来たので
稲葉はいたたまれなくなり、人気のない路地に逃げ込んだ。

わけのわからない紙袋がやけにズシリと重い。

なんだよこれ。こんな物ここに置いていってやる！
いや、さっきのおばさんに見られてるからそうもいかないか。

稲葉は急にそのつつみが憎らしくなり、ガッと掴み出すとバリバリ
とその新聞紙をめくり始めた。

「・・・・・・。」

中身はすぐに顔を出した。

稲葉は無表情のまま少し固まっていたが、
急にまた無表情のままガサガサと包みを元に戻して中身を隠すとそ
のままもう一度固まった。

どっからどう見ても拳銃だった。

一瞬触れた指先がその妙な冷たさを感じ取ったのに、まだ稲葉は今

見た物が信じられない。
だいたいそんな物が自分の手の中にあるなんて馬鹿げている。
でも、事実だ。さらにその手の中の塊は重量感を増して稲葉に存在をアピールしている。

稲葉は急に怖くなりあたりをキョロキョロ見回した。

どうしよう。警察か？いや、待て。僕は見られてる。
あれはどう見ても取引現場じゃないか？
かといってこんなもの、ここに置いて行くわけにもいかない。
どうしよう。

とっさに脳裏に宇佐美が浮かんだ。
バッグに手を伸ばし携帯を探す。

「・・・・・。」　忘れてたんだった。

再度稲葉は自分を呪った。
けれど凹んで居る場合じゃない。
自宅に携帯を取りに帰るよりもラビット事務所の方が圧倒的に近い。
行こう！
第一こんな物持ってデートなんてあり得ない。

すぐに稲葉はタクシーを止めて事務所に向かった。
そして降りるときに気が付いた。

財布を忘れた・・・。

幸い小銭入れは持っていたので支払はできたが、すっかり稲葉は自信を無くしていた。
朝も小銭で電車に乗ったので今まで気がつかなかったのだ。

けれどもやはり凹んでる場合じゃない。
ふらふらしながら13階の事務所に上がっていく。
日曜日だから二人とも居るはずだった。

“あれ？デートじゃなかったの？”って、ぜったい李々子は言うな。
昨日得意げにデートのことなんて言うんじゃなかった。
ますます稲葉の心はしぼんでいく。

ドアを開けると事務所の中に二人の姿はなかった。
けれど鍵はかかってなかったわけだから誰かいるに違いない。
電気だってついたままだ。

少し気がとがめたが、稲葉は宇佐美の自室へつづくドアをそっと開けてみた。
鍵はここもかかっていない。やはり居るみたいだ。
稲葉はなぜか、なんとなくそうっと足をしのばせて部屋に入っていった。

入ってすぐは沢山の書棚が壁一面に造り付けてある広めのリビングダイニングだった。
奥に小綺麗なキッチンがある。
その横にはバスルームに続くガラス張りのドア。
リビングの横にもう一つあるドアは寝室に続いていて、奥でバスルームに繋がっているのだろう。
とにかく片づいたきれいな部屋だった。
壁一面に納められた書物は全て医学関係の難しそうな本ばかりで、

稲葉は思わず息をのんだ。
いったいあの人は何なんだ？

“コン・・・”

奥から微かなくぐもった音。そして人の声。

ハッとして稲葉は我に返る。

もう一度耳をすませてみる。・・・・水音だ。
シャワーの音。
そして聞こえて来たのは李々子の声だった。

くすくすと笑いながら何かしゃべっている。
シャワールームから隣の部屋にいる誰かに話しかけている。
いつもよりさらに艶っぽい、可愛らしい声で。

「・・・・・あ。」

稲葉はとっさに動きを止めた。
そして頭の中に浮かんだイメージをブンブンと頭をふって振り払った。
全身にまたしても汗をかきながらジリジリ後ずさりする。
さっきは気付かなかったが、テーブルの椅子に李々子のバッグと、見覚えのある鮮やかなカーディガンが掛かっていた。

さらにそーっと足を忍ばせてドアの所まで行くと、注意深く音をたてないようにそれを閉めた。
そのまま、まるでゼンマイ仕掛けの人形のようにぎこちなく事務所をぬけて廊下に出る。
なんとかエレベーターに乗り込むが、
もはやボタンを押すのも忘れて正面の鏡に映った自分をただ見つめていた。
何の罰ゲームか、手にしわくちゃの紙袋をさげて立たされている男が映っている。

・・・・いや、いや、いや、全然おかしくない。
そうだよな、うん、そうだ。
僕が動揺する方がおかしいんだ。そうだよ。
ぜんぜん、おかしくない・・・・。

・・・ぜんぜん・・・。

急にガタンとエレベーターが動き出した。
誰かが呼んだのだ。体が降下していくのがわかる。

・・・僕はどうしようかな。お金も携帯もない・・・。

今日は喫茶鳳凰も定休日だ。
手に持っている紙袋がさらにズシリと重い。

もういっそのこと、このエレベーターが地の底まで行ってくれたらいいのに。

自分の不運とバカさ加減に打ちのめされて、稲葉はがっくりとうなだれた。

（つづく）

稲葉くんの憂鬱　第2話

事務所から歩いてすぐの私鉄のコインロッカーの前で稲葉はさりげなく辺りをみまわした。
とりあえずこの袋はコインロッカーに入れてしまおう。
対応は後で改めて考えるとして。

家に帰る金は宇佐美に借りよう。
もう少ししてまた行って・・・。

もう少しって、いつだ。いつなら大丈夫なんだ・・・。

稲葉はまた頭をブンブンと振った。
とにかくこの疫病神を手元から放そう。
小銭入れを取り出そうとカバンの中を見ると、入れっぱなしの手帳が目に付いた。

ハッとする。

慌てて中を開くとそれはあった。
まだ救いの神は自分を見捨ててなかったらしい。

緊急連絡網としての職員の名簿。
ちゃんと前園の自宅電話番号も入っている。
携帯でないのが少し残念だが。

そして李々子の名刺もそこに挟まれていた。

さっきまでの世界にひとりぼっち的な孤独感がやんわりと薄らいでいく。

稲葉は慌てて小銭を確認する。
２４０円ジャスト。
コインロッカーは２００円だ。
電話をとるか、ロッカーをとるか。

稲葉は紙袋を掴むと走り出した。
駅入り口の公衆電話へ。

この緑の電話を使うのは何年ぶりだろう。
少し震える指でコインを入れる。
前園先生は自宅にいるのだろうか。
ああ、どうして勇気を出して先生の携帯番号を聞いておかなかったのだろう。

コールが続く。留守電に切り替わらないでくれ。
祈る思いで稲葉は受話器を握りしめた。

コールが途切れた。
カチャリとうれしい反応。

『・・・・はい？』
前園の声だった。

「ま、前園先生、ごめんなさい、稲葉です。」
先ず謝ってしまうのは昔からの癖だった。なかなか直らない。

『稲葉先生？ああ、よかった！何度お電話しても繋がらなくて。』

「すみません、携帯を家に忘れてしまって！・・本当にすいません。」

『いえ、私のほうこそ行けなくなってしまって・・・・。
実は私の知人がバイクで事故に遭ってしまって、さっきまで病院に行ってたんです。』

「えーっ！それは大変じゃないですか！大丈夫なんですか？」

『はい、軽い打撲と擦り傷程度だと思うんですが、一応検査入院が必要らしくて・・・。
だから今、入院に必要な物を取りに自宅に戻ったんです。
本当にタイミングがよかったわ。』

「必要な物を取りにって、そんな親しいお知り合いなんですか？」

『はい、・・・・あの、実はこの冬に一緒になろうと約束した人で・・・。
あの、まだ内緒にしてくださいね、先生。』

「・・・・・・・・は、・・・・・・・はい。・・・・ええ、・・もちろんです。」

『あ、そうだ、ニュース見ました？
今日待ち合わせた場所の近くで朝、発砲事件があったんですって。
怖いですねえ。』

「は・・・。はい。そうですね。」

『あ、ごめんなさい、私もう行かなきゃ。本当にごめんなさいね。』

「いえ・・・・、はい。気をつけて。」

プッという悲しい音を残して電話は切れた。
張りつめていた何もかもが稲葉の中でブチンと切れた。
思考回路も停止してしまって、頭の中が空っぽだ。

一瞬現れた救いの神は舌を出してまたどこかに消えてしまった。
稲葉に残されたのは百円玉と物騒な紙袋と、李々子の名刺だけだった。

プログラムされたロボットのように稲葉は生気のない動きで李々子の名刺を手に取り、
百円玉をゆっくりその緑の投入口に滑り込ませた。

番号を入れる。きっと出ないだろう。それか留守電。
留守電だったら何て入れよう。バカだなあ、ぼくは。何しに電話かけたんだろう。
ぼんやりそんなことを考えていると軽やかなコール音。

そして意外にもツーコールで李々子の声が聞こえてきた。

『は～い、どなた?』

「あ・・・・・・・・あの。」

『あれえ？シロちゃん？　どうしたの？　どこから？』

不意をつかれたのと安心したのとで、稲葉はしどろもどろになった。
そして不覚にもじんわり目頭が熱くなってきた。
なぜだか稲葉にもわからない。
いつもの艶っぽい鼻にかかった甘い声。
気のせいだろうか、やけに口調が優しく思えた。

「け・・携帯と財布、忘れちゃって・・。今、公衆電話からなんです。」

『え～～？かわいそうに！でも今日デートだったんでしょ？』

「はは・・・・それはちょっと中止になっちゃって・・・。」

別の涙も滲んできた。

『そうなの？今どこ？近くならいらっしゃいよ。』

「い・・・いいんですか？」

『ん？　何で？　いいにきまってるでしょ？変な子ね。』

「そうですよね。変なんです。ぼく、今日。」

電話の向こうでクスクスと笑う可愛いらしい声。

『じゃあ待ってるからね。すぐ来るのよ。気をつけてね。』

軽快に言ったあと李々子のほうから電話は切れた。

ほんの少し体に血が巡って来たような安堵感を感じ、稲葉はひとつ息を吸い込む。

救いの神はまだそこにいるんだろうか。

それともまたすり抜けて消えていくんだろうか。

結局手元に残った紙袋を手に持つと、再び稲葉は事務所に向かって歩き出した。

さっきよりもまた更にズシリと重い。

“発砲事件があったそうね”

え？

急に前園の言葉が蘇ってきた。

え？

そう言えば今日はやけにパトカーや警官の姿をよく見かけた。

サイレンを鳴らすでもなく、わりと静だったので何かの取り締まり月間なのだと思っていた。

まさか発砲事件？そんな、ドラマじゃあるまいし。

思考回路にフタをして、また稲葉はズンズン歩き出した。
今日は何も考えないでおこう。
何となく自分を守るにはそれしかないような気がしていた。

今日の事は全て夢。悪い夢なんだ。

事務所のビルの入り口に着くまで稲葉はずっと数を数えていた。
何も考えないように。

３８１、３８２、３８３、３８４・・・

事務所ビルの入り口。３８５・・

パトロール中らしい二人の警察官のひとりと目が合った。

・・３８６、３８７、３８８・・・心拍数と共に数えるスピードも速くなっていく。

警官がじっと稲葉の顔を見ている。

“気のせい　気のせい”

慌てて目をそらした稲葉にその警官は何かを感じ取ったのか、ゆっくり近づいてきた。

やめてくれ・・・・。来るな・・・・・。頼むから！

心拍数はさらに上昇。視線は定まらず、膝もガクガクしてきた。
明らかに挙動不審な男だ。

だめだ、話しかけられたら、もうぼくは終わりだ！

ゆっくり警察官は稲葉のほうに歩いてくる。
逃げ出してしまおうか。
いや、それこそ取り返しのつかないことになる。

ああ、神様。もう勘弁して。夢ならここまでにしてください。

稲葉はぎゅっと目を閉じた。

（つづく）

稲葉くんの憂鬱　第3話

「あれ？　稲葉？」

ビルの中から出てきた人影が稲葉に声をかけた。

宇佐美だった。

「・・・宇佐美さん。」

かすれた声でつぶやき、稲葉は宇佐美を見つめた。

今、一番会いたい人に会えた。

稲葉は全身の力が抜けて、あやうくその場にへたり込みそうになった。

宇佐美は少し笑いながら稲葉の肩に手をかけると中へ入るように促した。

「李々子が心配してたよ。どうした？」

二人をしばらく見ていた警察官はほんの少し帽子のゆがみを直すと、無表情のまま歩いて行ってしまった。

「今日は警察官、よく見かけるね。何かあったのかな？」

去っていった警官の後ろ姿をチラッと見ながら宇佐美はのんきにつぶやく。

稲葉はエレベーターに乗り込みながらこれまでのいきさつをどこか

ら話そうかとドキドキしていた。
第一、宇佐美は信じてくれるだろうか。
かすかな上昇音。　しばらくの沈黙・・・。
妙に思ったのか宇佐美は稲葉をまじまじと見つめた。

「あれ？稲葉、その紙袋。」

「えっ？　なに！？　なんですか？？」

心臓が口から出そうなほどドキリとして稲葉はとっさに紙袋を後ろに隠した。

「なんで隠すの。ちょっと見せて。それってさあ、もしかして・・・。」

「もしかして？」

「・・・あ、やっぱり。」

「やっぱり！？」

宇佐美は稲葉の目をじっと見る。
へびに睨まれたカエルのような気持ちになって稲葉はエレベーターの壁に貼り付いた。

「ごめん、俺のだわ。」

チン　と拍子抜けな音と共にエレベーターのドアが開いた。

「・・・・・・・・・・・・え？・・・・」

「え？」

石のように固まった稲葉を見て宇佐美は手で口を押さえる仕草をしてみせる。

「あれ？怒ってる？」

「・・・・・何を？」

稲葉はまたしても思考を一旦停止させて宇佐美をじっと見つめた。

二人を乗せたままドアが閉まりかけたので宇佐美はガッと手で押さえ、

稲葉の肩を抱くようにしてエレベーターを降りた。

そのまま事務所の入り口まで行くと、まだボーッとしている稲葉からすまなそうに紙袋を受け取った。

「あのオッサンがね、足痛めたから近くまで来いって言うもんだからさ。

今日しか無理とか言うし。

じゃ、１０時くらいに映画館の前にこんな男が立ってるはずだから渡しといてくれって写メ送ったんだ。
君の。ごめん。」

「・・・・いや、いや、いや・・・話がわかんないんですけども。」

稲葉は胸元を少し開けた黒のシャツでいつになく爽やかなオー・ド・トワレの香りのする宇佐美をただじっと見つめた。

「だからね、俺、動けなかったから替わりに稲葉に受け取ってもらったわけ。その男から。」

「は？」

「中身は趣味のモデルガンなんだけども。」

「へ？」

「ごめんね。」

子供みたいに頭に手をやって申し訳なさそうに笑う宇佐美を見ながら稲葉は全身の力が抜けていくのを感じていた。

「メールすればよかったんだけど実はこの紙袋見るまで忘れてたんだ。
今朝は何かと忙しくて・・・申し訳ない。
そういえば李々子が言ってたけど映画、中止になったんだって？」

・・・モデルガン、・・・・メール、・・・・代理・・・・

・・・・・デート、・・・・映画、・・・・・・・・モデルガン・・・

“ふざけるな！”と怒鳴る気力もなく、稲葉は呆然と立ちつくした。

今日の自分っていったい何だったんだろう。

何やってんだろう。自分。

「大丈夫か？稲葉。　本当にごめんな。」

宇佐美が稲葉を覗き込んでそう言い終わらないうちにガチャリと事務所のドアが開き、李々子が顔をのぞかせた。

「あ、シロちゃん！待ってたのよ。大丈夫？・・・・顔が青いわよ？」

「・・・・李々子さん。」

すがるような想いで稲葉は李々子を見た。

その声に何とも言えない安堵感をおぼえて熱いものが込み上げてきた。

けれど李々子の着ていた服を見て、その感情にガッとブレーキがかかる。

さっき宇佐美の部屋で見た鮮やかな色づかいの薄手のカーディガンだった。

色白の肌に、ゆるく左肩で束ねた栗色の髪。
まだほんのり濡れているようにしっとりとウエーブしている。
きれいな色のカーディガンのせいか、まるで羽化したての蝶のようだ。
ちょっと猫っぽい瞳で稲葉を心配そうに覗き込む仕草もかわいらしかった。

稲葉は李々子のほうを向いたまま、振り向かずに宇佐美に話しかけた。

「宇佐美さん、・・・忙しくて取りに行けなかったんですよね。この荷物。」

「・・・え？・・・・・ああ。　ちょっと手が離せなくてね。」

「そうですか・・・。それならいいんです。　僕、疲れたんで　もう帰ります。」

くるりとエレベーターの方へ体を向けた稲葉に宇佐美は何か言おうとしたが、
替わりに李々子がその腕を掴んだ。

びっくりする稲葉。
李々子はそのまま稲葉をグイと引き寄せて首筋に唇が触れそうなほど顔を近づけた。
「なっ、なんですか！李々子さん。」
慌てる稲葉をよそに李々子はゆっくりと体を離し、稲葉に向き直って尋ねた。
「ねえ、シロちゃん。　さっき、ここへ来た？」
ドキリとする稲葉。
「な、何言ってるんですか！来ませんよ。来るわけないじゃないですか！」
「え？そう？おかしいな。確かにシロちゃんのコロンの香りだったのにな。」
「やめてくださいよ。知りませんよ僕！」
狼狽を隠すために少し怒り気味に否定する稲葉。
成功しているのだろうか。昔からウソはすぐに顔に現れる。
李々子は顎のところに手をやり、少し考えるそぶり。
そんな二人を宇佐美はきょとんとした表情で代わる代わる見つめた。
「そうよね。勘違いだったわね。」

李々子はさりげなくそう言うと、小さく折り畳んだ5千円札を稲葉の手に握らせた。

「気をつけて帰ってね。もう忘れ物しちゃダメよ。」

そう言って稲葉に微笑んだ。

稲葉は虚脱感と安堵と疲労感とむなしさの混ざり合った表情で李々子にぎこちなく微笑み返すと、
宇佐美の方は振り返らずにトボトボとエレベーターに向かい、乗り込んだ。

そして向こうを向いたままの稲葉を飲み込むようにしてエレベーターは降下していった。

残された二人はその扉をじっと見つめながらしばらく黙って立っていたが、
やがて李々子のほうからそっと宇佐美に寄り添ってきた。

「ウソつくの、上手ね。」

「・・・・・・。」

宇佐美はほんの少し李々子に微笑んだ後、くるりと向きを変え事務所のドアを開けた。
手にはしっかりとあの紙袋を持って。

李々子も黙って後に続く。
事務所に入ると宇佐美はカチャリと鍵を閉めた。

手袋をはめソファに座ると宇佐美は紙袋の中からゴワゴワになった包みをそっと取り出した。
慎重にその新聞紙をめくっていき、黒光りのするそれを取り出すとロックを確認。
グリップの底からマガジンを抜き出し砲弾の数を確認したあと再び元にもどす。

ピエトロ・ベレッタＭ９２。
世界中の警察や軍隊で使用されている最もポピュラーな半自動拳銃だ。
闇で出回っているのもこのタイプが多い。

「やっぱりあのニュースの銃なの？」

李々子がソファの後ろから身を乗り出して聞いてくる。

「９ｍｍパラベラム弾。２発だけなくなってるから、たぶんね。」

「びっくりね。」

「びっくりだよ。・・・・まさかあの場に稲葉がいるなんて。
まあ、あれだけそっくりだったらあの男が間違えるのも無理ないけ

どね。」
宇佐美は胸ポケットから小さな写真を取りだした。
そこに写っていたのは稲葉によく似たきれいな顔立ちの青年だった。

ほんの一週間前。
“近頃やけに怪しい連中がかわいい息子のアパートに出入りしている。
なにか脅されていやしないのか。自分には何も話してくれない。
心配なので調べてほしい。”

ホストをしている青年の母親からそんな依頼を受けた宇佐美はさっそく身辺調査に乗り出した。

だが、調べていくと最悪なことにそのホスト青年はすっかりヤクザまがいな商売に手を染めていた。主にロシアから流れてくる拳銃の密売。
あどけない顔をして雑踏の中、ひょいと危険な取引をやってのける。
依頼した母親の気持ちを思うと腹立たしくて仕方がなかったが、
ここまで来たからには現場を押さえてやろうと宇佐美は時間の許す限り貼り付いていた。

そして今朝。
この日青年は全ての予定をキャンセルしている。
絶対なにかあると踏んで宇佐美は貼り付いていた。
そしてふらふらと繁華街に出かけていった青年を追跡中にそれは起こった。

何かに気がついて青年は不意に足を速めて歩き出した。
小型カメラを構えて宇佐美は青年の視線をたどると、その先に見るからに怪しげな中年の男。
目つきで何かの中毒症状を起こしているのが宇佐美にはわかった。
その男が取引相手なのだろうか。
シャッターに指をかける。

けれど、予想外の事が起こった。

男はその二人の間あたりに立っていた別の人物に何か話しかけ、紙袋を渡したのだ。

その人物は稲葉だった。

思わず声を出しそうになったほど驚いたが、青年に気付かれるわけにはいかない。
あの中年の男が取引相手だと決まったわけではない。
もしも違っていたら苦労が水の泡だ。
出ていって稲葉に確認をとるわけにもいかず、宇佐美はふらふらと歩き出した稲葉の背中を複雑な想いで見送った。

“なんで稲葉・・・？？”

ホスト青年はしばらく頭をぽりぽり掻いていたが、やがてゆっくりと今来た道を戻りだした。
なんの感情も顔に表さない青年に苛つきながら宇佐美はその後を追った。

たしかに稲葉は今日、ここの映画館に来るとは言っていたが・・・。

青年を追いながら混乱した頭で宇佐美は稲葉の携帯に電話をかけた。
・・・・・・出ない。　何度かけても出ない！

ホスト青年は早い時間にもかかわらず、その後は大人しく自分の勤める店に入っていった。
キャンセルした業務にもどるということは本日の動きはそこまでということか。
取引は失敗・・・？
ではやはりさっきのか！
宇佐美はとりあえず事務所に戻ることにした。

タクシーを止めようと映画館の裏通りあたりまで戻ってみると、やけに物々しい。
サイレンを消してこそいるが、パトカーや警官の数が尋常じゃない。
競馬新聞を握った暇そうな野次馬中年男性に話を聞いてみると
どうやら発砲事件らしいということだった。

・・・・まさかとは思うが・・・

宇佐美は紙袋を抱えて無防備に歩きだした稲葉を思いだし、胸騒ぎをおぼえて慌てて事務所に戻ってきたのだった。

「その中年男性が撃ったの？」

「たぶんね。目が尋常じゃなかったから。
なにか気に入らないことでもあったんじゃない？ゴミバケツに2発

だって。・・・猫かな。
幸い怪我人はいなかったけど、目撃者もいないらしい。」
「世も末ね。・・・・・で、どうするの？」
李々子はあいかわらずソファの後ろから背もたれに肘をつき、宇佐美を覗き込んでいる。
「そうだな・・・こいつとさっき撮ったあの男の写真を警察に投げ入れるかな。」
「あのホストくんも捕まる？」
「時間の問題だね。」
「あの子のお母さん、気の毒ね。」
「かわいそうだけど、うやむやにするつもりはないよ。」
「冷たいのね。」
ほんの少し笑って李々子は宇佐美の肩に手をのせる。
「でも、なんでシロちゃんにウソつくの？　きっと諒に怒ってると思うわよ？
うん、かなり頭にきてた顔してたもの。・・・諒は平気なの？」
宇佐美はさりげなく李々子の手から体を離すと銃を布で丁寧にふきとりはじめた。

「あんまり関わらせたくないんでね。こういう事に。」

「それだけ？」

「うん、それだけ。」

「・・・・そう。」

稲葉が触れたかもしれない鉄の塊。

李々子はそれを注意深く拭きとるきれいな指をじっと見つめていた。

さらに元あった新聞紙に器用にそれを包み込むのを見ながら李々子は猫のようにそっと宇佐美の肩に頭をのせた。

「あ！」

「え？」

急に宇佐美がこっちを向いたので鼻先が触れそうになり、今度は慌てて李々子が体を退いた。

「おまえさあ。」

「なに？」

「お前なんで勝手にシャワー使うわけ？」

宇佐美はソファの背もたれに抱きつくように身を乗り出して李々子を睨みつけた。

「あれ？バレちゃった？」

「バレちゃったじゃねえよ。稲葉の携帯に繋がらなかったからダメ元でお前にかけたら・・・。あの時は尾行中だったから言わなかったけど、しっかりエコーかかってたぞ！」

「そっか、やっぱりわかっちゃうのね。今日熱かったしさあ・・・。ウォータープルーフの携帯に替えたから威力を試してみたのよ。」

「そんなもんここで試すな！家でやれ家で！住居不法侵入だぞ。だいたいあの時稲葉が来たら引き留めておいてくれって頼んだのに、意味ないじゃない。」

「そうね、出ていけないものねえ。ハダカじゃあ。現にシロちゃん一度来たみたいなのよね。かわいそうな事したわ。」

「・・・・え？」

「ん？」

「今　何て言った？」

「一度来てたみたいって言ったのよ。」

「来たって・・・・事務所に？」

「あなたのリビングに。　私、臭いにも敏感なのよね。
シロちゃんの使ってるコロンの香りがしたからもしかしてって思ったのよ。
さっきその話したら赤くなってたから間違いないわ。
勘違いしちゃったのね、あの子。」

宇佐美は一瞬石のように固まり、しだいに青ざめていった。

「・・・・カン違いって何だよ。・・・・何だよカン違いって！！」

李々子は肩をすくめて小さく舌を出し、最上級の笑顔で笑って見せた。

「えへ。」

「えへ　じゃねえよっっ！！　バカ李々子～～～～！！！！！」

薄暗い部屋に一人帰り着いた稲葉。

テーブルの上にきちんと鎮座している財布と携帯を溜息混じりに見おろす。

こいつを忘れなかったら今日の僕はもう少し救われていたのだろうか。

携帯を手に持って、開いてみる。

メールはなかったが３件の着信。

１０時５６分

１０時５９分

１１時０３分

いずれも宇佐美からだった。

この時間は・・・・・。

ハッとして携帯を落としそうになる稲葉。

この時間は最初に事務所に行って宇佐美のリビングに入ったあたり。
李々子がシャワーしていて・・・・・・。

なんで？

なんで僕に電話するんだよ。
そんな最中に！

なんで僕に電話かけるんだあ～～～？？

頭の中で爆発寸前の怪しげな妄想に押しつぶされそうになりながら
きっと今日はとんでもない夢を見ると確信したかわいそうな稲葉だ
った。

つづく（『稲葉くんの憂鬱・終）

ファースト・ミッション　第1話

テーブルの上にうずたかく積まれた古い資料やファイルの山を見ながら、
今日も稲葉は控え気味にぼやいた。

「これ、また李々子さん出しっぱなしで行っちゃったんですか？」

何やら分厚い書物を読んでいた宇佐美は顔を上げ、稲葉を見て少し笑った。

「ごめんね、探すのはうまいんだけど片づけが苦手なんだ。」

「あ・・、いえ、そんな。いいんですけどね、仕事だし。」

ごめんねと言われた事に稲葉は少し釈然としないものを感じた。
他人行儀な言葉に、なのか。李々子のことを謝られたからなのか。
僕が勝手にに押し掛けて働いてるのに、なに文句言ってんだろ。

自分に少し腹を立てて稲葉はバサッと目の前のファイルを掴みあげる。
勢いよく持ち上げたので一冊のファイルがめくれて、
その間から一枚の名刺がハラリと足元に落ちてきた。

「ん？」

その名刺に書かれている名前を見て稲葉は首をかしげた。

“卯月探偵事務所所長　卯月宗一郎”

卯月？所長？　・・・なんで李々子さんと同じ苗字？

名刺を拾い宇佐美を振り返ったのと同時にカチャリとドアが開き、李々子が入ってきた。

いつになく大人しく入ってきた李々子に一瞬違和感を感じた稲葉。けれど宇佐美は本から顔を上げずに少し嫌みっぽく李々子につぶやいた。

「また寄り道して来たろ、李々子。今日は忙しくないからいいけど、銀行行くって出たきり3時間とかやめてくれよな。」

一瞬の間。

けれどその後はいつもの李々子だった。

ニタッと笑って宇佐美のデスクに近づくと読んでいた分厚い本をパタンと閉じた。

「あ！何すんだよ！」

「またひねくれた言い方しちゃってえ。私がいないと寂しいって素直に言ったらどう？」

「バカか！そんなこと言ってんじゃないよ。」

「あら、そう？じゃあ、なに？」

宇佐美は面白そうに下から覗き込んでくる李々子から体を交わすようにして椅子から腰を浮かせた。

「もういいよ。出かけてくる。」

「あ、待って！」

李々子が少し慌てたように宇佐美のシャツの袖を軽く掴んだ。

「なに。」

「今夜泊まってもいい？」

稲葉は抱えていたファイルを思わずバサバサと床に落とし、バカみたいに大きな音を立てた。

「アホかお前は！何考えてんだまったく！」

宇佐美は呆れた顔で言うとバタバタと外出に持っていく書類を用意し始めた。

稲葉は慌ててファイルを拾いながら、少しドキドキして二人をチラリと見上げる。

「やあね、別に取って食べようって訳じゃないわよ。」

「当たり前だろ！」

「近頃ちょっと怖いのよ一人は。」

「怖い？」

「そう。どうもストーカーに後つけられてる気がして。」

「ストーカー？」

宇佐美と稲葉は一瞬顔を見合わせた。

「そう、ストーカー。」

「ストーカーってあのストーカー？」
「あのストーカーもこのストーカーもないでしょ！」
宇佐美は今度は李々子の顔をじっと見つめた後、ニヤリとして言った。
「勘違いだろ？大丈夫、大丈夫。俺が保証するから。そんな暇な奴はいないって。」
「失礼ね～、まったく。後で後悔するわよ？こんな魅力的な女性を一人にしといて。」
李々子は子供みたいに頬をふくらませて宇佐美を睨んだが、宇佐美は付き合いきれないといった風に軽く受け流して書類をまとめるとサッサと出ていってしまった。

「諒のばーか！」
李々子はしばらく宇佐美が出ていったドアを睨みつけていたが、稲葉の視線に気付いたのか振り返ってニコッと笑った。
「可愛くないわよね、あの人。すぐ怒るしジョーダン通じないし。中高生じゃあるまいし、潔癖ぶってバカみたい。」
「え？ジョーダンなんですか？ストーカー。」
稲葉は少し驚いて聞き返した。
「え・・・・。そうよ、ジョーダン。」

李々子はもう一度ニコッと微笑むとまたほんの少しドアの方を見つめた。

背中の大きく開いたきれいなブルーのチュニックにゆるくアップした髪。

細く白い首筋に柔らかくウエーブした後れ毛が色っぽい。

何となくじっと見つめてしまった自分に罪悪感を感じて稲葉は視線を落とした。

・・・・あ。

手にはまださっきの名刺が握られていた。

「ねえ、李々子さん？」

「なあに？」

「この名刺なんですけど。」

稲葉がそれを手渡すと李々子はすぐに懐かしそうに微笑んだ。

「ああ、パパの名刺ね。まだ残ってたんだ。」

「え？・・・・パパって・・・・。」

「あれ？何も聞いてないの？ここは１０年前までパパの事務所だったの。

名前も卯月探偵事務所。パパ一人でやってたんだけどね、
諒が大学2年の頃からバイトで来てくれてたんだって。
私は諒が所長になったすぐ後にパパと入れ替わりにここに入ったのよ。」

「へえ、そうだったんだ。10年前ってことは・・・・。
え？宇佐美さん、大学院生の時にもうここの所長を引き継いだんですか？」

「そうよ。社名も変えて何でも屋っぽくなっちゃったけどね。
とても優秀な助手だったからパパは諒に引き継ぐことを何も心配してなかったみたいよ。」

「だって、お父さんは？」

「病気だったの。
アメリカに行って余生を過ごそうと思ったみたいでね。
勝手に決めて一人で行っちゃった。・・・・で、それっきり。」

李々子はさらりと言うとニコッと笑った。

「あ・・・・ごめんなさい。」稲葉は思わず謝った。

そんな展開になるとは思っていなかった。
言葉につまって稲葉は少しあわてて別の話題を探した。

「でも・・・・・宇佐美さん、大学院は？
このまえ笹倉が言ってたけど優秀な医学生だったんでしょ？

まさかここを引き継ぐからやめちゃったんですか?。」

「・・・・・。」

稲葉の言葉に李々子は一瞬答えに困ったように視線を泳がせた。

「・・・そうじゃないと思うわよ。」

「じゃあ、なんで宇佐美さんは医学の道を諦めたんですか?
だって准教授の椅子まで用意されてたんですよ?普通あり得ないでしょう。」

李々子は稲葉から視線をはずしたまま、そっけなく答えた。

「さあ。　私、知らない。」

稲葉は李々子を見た。

知らない?知らないんだろうか李々子さんは。ずっと一緒にいて?

・・・・・うん。

知らないんだよな、きっと。
そんなことだってあるさ。

それに僕には関係ない事だし・・・。

李々子は宇佐美が出しっぱなしで置いていった分厚い医学書をしばらく見つめたあと
宇佐美の椅子に座り、ついていないＰＣの画面をぼんやり見つめている。
稲葉はそんな李々子を複雑な思いで見ていた。

もうこの話題に触れるのはやめておこう。

・・・・だって、ぼくは今のままでいたいから。

（つづく）

ファースト・ミッション　第2話

翌日、ＰＭ１：３０。喫茶鳳凰。

いきなりテーブルの上にアイスコーヒーをドンと置かれたので少しボーッとしていた稲葉は１０ｃｍくらい飛び上がった。

「びっくりした～！」

「どうしたんですか？稲葉さん、こんな時間に。今日は学校サボったの？」

ナオが脳天気な声で不思議そうに稲葉を覗き込みながら言う。

「不良学生みたいな言い方やめてよ。今日は午前中で終わりだったんだ。」

稲葉は少し口をとがらせ気味に言い返す。

「ラビット、行かないの？」

子供みたいにナオは小首をかしげて聞いてくる。

稲葉はドキリとして一瞬言葉を詰まらせた。

「行くけど、・・・・・ちょっとここのコーヒー飲みたくなったからさ。」

「え～。マスターのコーヒー飲みたがるなんて珍しいお客ですね。」

「いやいやいや。マスターに聞こえるから、ナオちゃん！」

“あれ？”

不意に妙な視線を感じて稲葉は辺りをぐるりと見渡した。
店内には5～6人の客がパラパラといるだけ。
それぞれに新聞を読んだり携帯を見ていたりするだけで、特に怪しい感じではなかった。
“何だかやけに粘っこい視線を感じたんだけど・・気のせいか。”

その時稲葉の携帯の着信音。宇佐美からだった。

めずらしいな・・・。

ナオが気をきかせてカウンターの奥に引っ込んだので稲葉はその場で電話に出た。

「はい？」

『ごめんね、今学校？』

「いえ、今日はもう終わりなんで。」

いつもより宇佐美の声が沈んでるように聞こえた。

「どうしたんですか？」

『・・・どうしたって事もないんだけど。』

「え？何でもないのにかけてきたんですか？」

『いや、何でもなくもないんだけど。』

「だから何なんですか。」

『李々子がね・・・。」

「え？」

『李々子がいないんだ。』

「いないって、どういうことですか。」

稲葉は携帯を持つ手に力を入れた。

『今朝事務所に来なかったんだ。携帯にも繋がらない。
自宅の電話も留守電のままなんだ。で、稲葉、何か知ってるかなと思って。』

「宇佐美さんが知らないのに僕が知ってるわけないでしょ？」

そう言った自分の言葉に少しトゲがあるのを感じて稲葉はドキリとした。

『そう・・・。うん、ならいいんだ。ごめんね。じゃあ。』

「あ、ちょっと待って。じゃあって何！」

『え？』

「探しましょうよ李々子さん。」

『探すって、どこを？　いいよ、子供じゃないんだから。』

「子供じゃないから危ないってこともあるでしょう！」

『・・・・・。』

「あ～～。もうもうもう！今から行きますから。すぐ行きますから！」

稲葉は急いで支払を済ませると店を飛び出した。

それから一時間後、宇佐美と稲葉は李々子のマンションのドアの前に立っていた。

急かすようにじっと宇佐美を見つめる稲葉。

いつになく参ったような表情の宇佐美。

「ほら、早くベル押してくださいよ、宇佐美さん。

李々子さんのこと心配なんでしょう？まったく素直じゃないなあ。

こんな時は顔に出したっていいんですよ。」

宇佐美はほんの少し真面目な表情で稲葉をじっと見たあと、クスッと笑った。

「何？　今笑ったでしょう。何がおかしいんですか！」

「いや、ごめん。笑ってない、笑ってない。」

「笑ったでしょ？ぜったい笑いましたよ！」

「いや、だって、稲葉・・・・・、まあ、いいや。」

「いいって何ですか！気になるじゃないですか。大体あなたはねえ・・・」

何か吹っ切れたのか稲葉の話の途中で宇佐美はベルを押した。

けれどやはり反応は無い。

がっかりした表情の稲葉と一瞬目を合わせた後、宇佐美はゆっくりドアのレバーを引いてみた。

「あ、開いた。」

「へっ？何で？」

もう一度顔を見合わせた後ふたりはそっとドアを開けて中の様子を覗いてみた。

ワンルームなので玄関から中の様子はほぼ見渡すことができた。

「・・・・・・。」

息をのむ稲葉。

部屋の中は引き出しという引き出しが全て開けられ、
クローゼットの中のバッグ類も床に散乱してひどい状態になっていた。

「宇佐美さん・・・・、これ。」

「李々子のやつ、散らかしたな。」

「違うでしょ！
これは明らかに空き巣か何かでしょう！何か犯罪に巻き込まれたのかもしれない。
こんな時に冗談言うのやめてもらえますか？」

すごい剣幕で噛みついてきた稲葉に少し圧倒されながらも宇佐美は苦笑した。

「落ちつけって、稲葉。お前は何ですぐそう興奮すんだよ。」

「だって部屋が荒らされてて李々子さんがいなくなっちゃったんですよ？
心配じゃないんですか？あなたは。」

「心配して取り乱したら何か解決するの？」

稲葉は振り返る。

宇佐美は部屋には入らず、注意深く部屋の様子を観察していた。
その横顔は落ち着いていたが真剣だった。

心配してないはずないじゃない。

稲葉は自分の携帯に電話をかけてきたときの宇佐美の声を思い出していた。

「稲葉。」

宇佐美が急に振り返ったのでじっと見ていた稲葉は少しうわずった声を出した。

「はい？」

「帰ろ。」

「え？・・・だって、警察に連絡するとか・・・。」

「うん、とりあえず帰ろう。テーブルの上に事務所の鍵があった。忘れて行ったんだ。李々子が入れないで困ってるかもしれないだろ？」

そう言って少し笑った。

「・・・・・。」

稲葉は思った。

ある特殊なカンというものが探偵業をしていたら身に付くのだろうか。

それとも長年一緒にいる人に対して働く能力なのだろうか。

李々子は事務所の前にいた。

ドアの前の廊下を挟んだ壁にしゃがんでもたれかかり、膝をかかえて子供みたいに眠っている。

宇佐美と稲葉は無言で目を合わせると安堵の息をもらした。

「李々子さん、起きてください。」

稲葉が肩を揺すると李々子は眠そうに目をこすった。

「ん・・・・?あれ?二人ともどこいってたの?」

「どこ行ってたのじゃないよ、ばか李々子。

お前探しに行ってたんだよ、マンションに。

まさか昨日帰らずに一晩中飲んでたのか?酒臭いぞ?」

宇佐美が少し声を荒げて言うと、李々子は悪びれる様子もなくニッ

コリ笑った。

「怒んないでよ。家にいると落ち着かないから友達と飲みに行ったの。
そしたら盛り上がっちゃって気がついたら朝。電話しようと思ったのよ？でも電池切れちゃって。
仕方なくここに来たら鍵もなかったの。」

「お前は普通の会社員だったらすぐクビにされるな。」

鍵を開けながら宇佐美はあきれ果てたように溜息をついた。

「なんだ、もっと怒られるかと思った。」

「彼女だったら怒ってる。」

「あら残念。」

「で、お前んち、空き巣入ってたから。」

「え？」

ついでのようにさらりと言ったので李々子はキョトンとして宇佐美を見た。

「そうなんですよ李々子さん！部屋がすごく荒らされててね。
何か取られたものないか、すぐにチェックした方がいいですよ。
あ、もしかしてこの前言ってたストーカーの仕業だったり・・・」

「稲葉！」

稲葉の言葉を少し慌てて宇佐美が遮った。李々子に見えないように指を口に当てる。

「・・・・・・。」

稲葉はハッとして言葉を飲み込んだ。

李々子をチラリと見ると青ざめた顔で壁を見つめている。

「ま、とにかく入ってお茶でも飲もうよ。

後で李々子は稲葉に送ってもらったらいい。稲葉、君に貸すから。」

無言でうつむきながら事務所に入っていく李々子の後ろ姿を見ながら稲葉は横にいた宇佐美を見た。

「ごめんなさい。」

宇佐美は小さく笑う。

「ああ見えて臆病なんだ。李々子は。」

怖がらせないように宇佐美は極力さらりと言ってのけていたのだ。

稲葉は改めてそれに気付いて自分が情けない気持ちになった。

「あれ？」

事務所に入るなり宇佐美が声を出した。

「え？どうしました？」

稲葉と李々子は不思議そうに宇佐美を見た。

宇佐美は何か考えるような仕草で部屋の中をぐるりと見渡した。

稲葉も思わず同じように部屋を見渡してみる。

「どうかしたんですか？」

稲葉がいぶかしげに聞いた。

「・・・何か違和感があったんだ。ねえ、李々子。何か感じなかった？」

「え？・・・ううん、全然。」

李々子が首を振って答えたので宇佐美もそれ以上何も言わずにソファにゆっくり座った。

けれどまだ何か腑に落ちない表情を浮かべている。

「あ！」

次に声を上げたのは李々子だった。

二人が振り返ると李々子は自分が開いたままにしていたノートパソコンの画面から一枚のメモをゆっくり剥がして二人に見せた。

「何？」稲葉が駆け寄った。

大判のクリーム色の付箋に赤い文字が書いてある。
付箋も赤いマジックも李々子の机の上にあったものだ。
けれどその文字はここにいる誰のものでもなかった。

「・・・“赤いバッグの中”。」

文字を読んで稲葉は宇佐美と李々子の顔を見た。
李々子は何のことか分からないと言った表情で稲葉を見返した。

「李々子・・・。」

しばらくその文字をじっと見つめていた宇佐美はゆっくり李々子の方を向くと静かに言った。

「今夜はここに泊まってもいいよ。」

これは・・・・。

稲葉はゴクリと息を呑んだ。

（つづく）

ファースト・ミッション　第3話

「赤いバッグ・・・・って何の事だろう。」

宇佐美はその小さな紙片をつかんで考え込んでいる。

「いや、宇佐美さん、それよりも誰かがこの事務所に入り込んだって事の方が問題ですよ。
何か取られたり情報盗まれたりしてるかもしれませんよ。
いいんですか？指紋とか取ったりするんじゃないんですか？
触っちゃってるけど、そのメモだって・・・。」

「“マエ”のある人間ならそもそも指紋なんて残さないよ。
ましてやこんな危ないメモなんてね。物取りとは思えないんだけど。
」
宇佐美は静かに言った。

「“誰が何のために”よりも“何のことか”が今知りたいんだ。」

「赤いバッグ・・・・私ひとつ持ってるけど・・。」

李々子がポツリと言った。

「それ、どこにあるの？」

思わず同時に叫んだ二人。

「この前持ってきたときからずっとこのクローゼットに入れてある

の。
大きくてあまり使わないから・・・。」
そう言いながら李々子はクローゼットの中から赤いトートバッグを出して二人に見せた。
「これの事かしら。」
確かにあまり持っているのを見たことのない大きな真っ赤なバッグだった。
「中身見ていい？」
「いやよ。」
「じゃあ・・・李々子が確かめてみて。何か変わったものが入ってない？」
「変わったものねえ・・・。」
李々子はガサガサと中身を出しながら探し始めた。
ハンカチ、ファイル、ポーチ、小冊子類、小さなスプレー缶、何か解らないものがごちゃごちゃ机に並べられる。
「お前なあ、もう少し整理するとかできないの？」
宇佐美が呆れた声を出した。
「仕方ないでしょ。女の子はいろいろ物入りなのよ。」
「女の子って感じではないけど。もはや。」
「カチンと来るわね。独身だから女の子なのよ。」
「そんなんじゃ誰ももらってくれないよ？」
「うるさいわね！いいじゃないの。私が片づけられないと諒に何か

迷惑かけるわけ？」
「常に稲葉に迷惑がかかってるよ。なあ、稲葉。」
「いやいやいやいや・・・・。」
急に飛び火させられて焦る稲葉。
何もこんな時に李々子さんを怒らせること言わなくてもいいのに。
そう思いながらも稲葉は黙って二人を見ていた。
少し笑いながら李々子を見ている宇佐美。
言い返しつつもガサガサとバッグを確かめる李々子。
そこにはさっきまでの青ざめた不安そうな表情はなかった。
あ、そうなんだ。
稲葉はもう一度、キツイ事を言いながらも優しい目を李々子に向けている宇佐美を見た。
「あれ？これ、何？」
突然李々子が大きな声を出した。
そしてバッグの中からシルバーの携帯を取りだした。
「触らないで、李々子。」
宇佐美が突然大きな声を出したので李々子はデスクの上にそれをコトリと落とした。
「もう！びっくりするじゃない！」

「ごめん、ごめん。」
宇佐美はそれをハンカチでそっと掴んだ。
「これ、李々子の携帯じゃないの？」
「同機種だけど違うわ。だって・・・・ほら。」
李々子は今日持っていたバッグからそれとそっくりな自分の携帯を取りだした。
プラチナの小さなストラップがついていなければ見分けがつかない。
「どうしたの？この携帯。」
宇佐美は李々子の机の上にあった充電器に電池の切れたその携帯をセットしながら聞いた。
「わからない。なんでこんなのが入ってるの？」
「俺に聞くなよ。」
「だって・・・・。」
「このバッグを一番最後に使ったのはいつ？」
「え～と、４日か5日前かな？帰るときは別のを使ったからそれからずっと置いてある。」
「誰かに後をつけられてる気がしたんだろ？４～5日前から。」

「ええ・・・・そう。」
李々子はハッとした表情をして宇佐美を見た。
「これに原因があるのかもね。
この携帯を何らかの理由で李々子に持って行かれた人間がつけ回していた・・・とか。」
「じゃあ、李々子さんの部屋の・・・空き巣も？」
稲葉がこんどは慎重にそうっと口を挟んだ。
「確証はないけど。」
「どうして直接言わないのかしら。でも、とにかくこれを返せばいいのね？」
李々子はほっとした声で宇佐美を見た。
宇佐美は少し困ったように笑いながら、充電器に繋がれたその携帯の電源を入れた。
「まあ、普通の人だったらいいんだけどね。」
電子音と共に電源が入ったその携帯をハンカチで擦ってしまわないように慎重に操作する。
メール、着信、全ての履歴をチェック。
「用心深いね。メールはすべて消されてる。アドレスだって一件も入っていない。」
「まだ買い換えたばっかりだとか。」李々子が覗き込みながら言う。

「でも、ほら、着信はずいぶん前から入ってる。」
電話の着信履歴には２３件入っていた。
ずいぶん前からのもあるが、４日前から１７件。
「相手は連絡がとれなくなって焦ってるみたいだね。
すべて非通知。一方通行の電話。
メールは証拠が残る可能性があるから送らないって事か。
万が一第三者に渡っても大丈夫なように。
この携帯の持ち主を信用していないか、もしくはまるでペーペーの・・・・。」
そこまで言うと宇佐美は稲葉に向き直った。
「稲葉、今日はもう帰っていいよ。ごめんね。」
「え・・・だって・・・。」
「ちょっと李々子のマンションまで二人で行ってくる。」
「じゃあ、僕、留守番してます。」
「いつ帰れるか分からないしね、いいよ。ごめん。」
「・・・わかりました。気をつけてくださいよ、二人とも。
ぼく、じゃあ、ちゃんと鍵かけときますから。」
稲葉は精一杯笑顔を作った。

李々子にその赤いバッグを持たせると宇佐美はさりげなく寄り添うように一緒に部屋を出ていった。
その後ろ姿を見送った後、稲葉はちいさく溜息をつく。

「ごめんって、なんだよ。」

シンとした部屋にひとり取り残された稲葉はそう小さくつぶやくとさっきの小さなメモを掴み、くしゃっと手の中で握りつぶした。

“男”はじっと息を潜めていた。

最初に入ってきた人物が「違和感を感じる」と言ったときはガラにもなくドキリとした。

まだもう一人出ていかずに残っているらしい。

もう少し待つか。いや、出ていって羽交い締めにするか。

その驚いた顔を想像するのも楽しかった。

“男”は給湯スペースの中の小さな隙間に体を折り曲げて隠れたまましばらく考えた。

少し首を伸ばすとソファに座っている残されていった青年の横顔が見える。

“男”は気付かれないようにじっと見つめていた。

端正で美しいが、何か少し元気のない憂いたその横顔を。

そして決断する。

・・・・もう少し　待つか・・・・。

（つづく）

ファースト・ミッション　第４話

李々子はたった一人、自分のマンションのドアの前に立っていた。
回りをさりげなくキョロキョロしたが平日の昼間の廊下には誰もいない。
鍵を開けようとして初めて自分が鍵をかけていないのに気がついた。
小さく肩をすくめながら李々子はドアを開けた。
そして小さく甲高い声を上げる。
荒れ果てた自分の部屋に呆然として思わず赤いバッグを廊下に落としたまま李々子はふらふらと部屋に入っていった。
李々子を飲み込んだままドアは自動的にバタンと閉まる。
廊下にポツンと置かれた赤いバッグ。
そのまま時間だけが過ぎていく。
３分・・・・５分・・・・８分・・・。
１０分。・・・・少し骨太の手がそのバッグを掴みあげた。
掴んだ男は慌てた様子で辺りを見渡すと、
バッグを握りしめたままソロソロと階段に向かって歩き出した。
「はい！　そこまで。」

声と共にパシャッとフラッシュ光。
デジカメを構えた宇佐美がニヤッとして柱の影から顔を出した。
赤いバッグを握りしめた二十歳そこそこのその青年は固まったようにその場に動かなくなった。

「賢いね。逃げるのは得策じゃないもんね。現行犯だし。
そして何より君の大事な携帯預かったままだ。指紋付きの。」

宇佐美はハンカチにくるまれた携帯を青年に見せた。
青年は青ざめて固まったまま宇佐美と携帯を見つめている。
すぐ後ろのドアが小さく開いて李々子が顔を覗かせた。

「ねえ、私の演技どうだった？うまくいった？」

宇佐美は男から目を離さずに笑った。

「あれじゃ高校演劇にだって出してもらえないな。」

ぷっと頬を膨らませて怒る李々子。

「ちょっと話をしようか。」

宇佐美が青年に話しかけた。
青年はゆっくりと素直にうなずくとぽとりとバッグを床に落とした。

「初めての仕事だったんじゃないの？君にとって。

大事な取引の指示の連絡のためにだけ渡された携帯を君は無くした。
以前同じケースの取引を尾行したことがあるから気がついたんだ。
・・・・ここまでは合ってる？」

「・・・・・。」

「悪いけどこっちはこういう事調べるのが本業なんだ。隠しても無駄だよ。
それに君はまだ何もしていない。だろ？　ねえ、取引しようよ。」

宇佐美は優しい口調でその青年に話し続けた。
青年はまだ子供っぽさの残る大学生くらいの年に見えた。
何かの弾みでやばいアルバイトに手を出したらしいその青年は
少し怯えた目で宇佐美をただ見ていた。

「今度電話がかかってきたら君は普通に出てほしい。
そしてその指示を聞いて取引内容を僕らに教えてほしい。
その瞬間から君は正義の味方だ。君がやったことにはこのさい目をつぶろう。
・・・どう？悪くないでしょ？」

まるでイタズラを思いついたようにニタッと笑う宇佐美につられて、
青年も少し表情を崩した。

「・・・・ぼくは何の罪になるんでしょうか。」

青年はぽつりとつぶやく。

「まあ、李々子の部屋を散らかした罪かな。」

「で、でもあの部屋は始めからあんな感じでした。鍵だって開いてたし！」

必死に宇佐美にすがりつく青年。李々子は視線を泳がした。

「あ・・・、やっぱりね。うん、君を信じるよ。」

青年は少しホッとして表情を崩した。

「そもそも何で携帯が李々子のバッグに入ったの？」

「5日前の朝、電車に飛び乗ろうとした時この女の人とぶつかって携帯落としたんです。
そしたらその人が拾ってそのままバッグにぽんと入れて電車に乗っちゃって。
もう、ものすごく焦りました。無くしたなんて知れたら殺されるんじゃないかと。
その日は見失ってしまったけどまた同じ時刻にその駅でこの人を見つけられたんで・・・。」

「それでずっと私のことつけてたのね？」

「すみません、顔を見られないようにして携帯だけどうにか取り返そうと思ってて・・・。」

「そもそもお前がそそっかしいからいけないんだよ。」

「だって自分のだと思ったんだもん。」

「考えたらこの人は携帯を持って行かれたかわいそうな人だよ。」

青年は思わずホッとした表情を浮かべた。
そこには自分が犯罪を犯さずにすんだ安堵感が浮かんでいる。

「けど・・・。」

宇佐美はそんな青年をチラリと見て少し厳しい口調で言った。

「君がこれからやろうとしていたことは重罪なんだ。分かってるね。」

青年の顔が再び引きつった。

「協力してくれるね。」

その言い方にはもう青年への選択権はなかった。
ぴんと張りつめた空気の中、青年はゆっくりと頷いた。

夕暮れ時の喫茶鳳凰。

「もう、ほとんど水ですね、稲葉さん。入れ直しましょうか？」

氷が溶けきったアイスコーヒーをいつまでもくるくる回してボーッとしている稲葉にナオが話しかけた。
ハッとして稲葉は慌てて笑った。

「いいのいいの。二人を待ってるだけだから。」

「すっかり待合室代わりね。事務所に持っていきましょうか？コーヒー。」

「それがね、ちょっと気味悪い事があったし何となく一人で居たくないんだよ。」

「気味悪いこと？」

「実はね・・・。」

そう言いかけたとき携帯の着信。宇佐美からだった。
稲葉はナオにごめんねと断ると小声で電話に出た。

「・・・・・え？犯人つかまえたんですか？２１歳のフリーター？ん？犯人じゃない？どうして？・・・本当の犯人が警察に捕まった？取引？麻薬？現行犯？・・・わかんないですよ、ちゃんと説明してください。
・・・今から事務所に帰るんですね。ぼく待ってます。いえ、待ってますから！」

立ち上がり、少し興奮気味に電話を切った後、稲葉はじっと携帯をみつめた。

よく分からなかったけど、もっと大物の犯人を捕まえちゃったんだ、宇佐美さんは。
なんだって一人でやっちゃうんだ。すごいな。
・・・・僕なんて今回も出る幕もなく・・・。

・・・・あれ？

稲葉はふと考えた。

何か、まだ忘れてるぞ？

稲葉はしばらく考え込んだ後携帯を持ち直して宇佐美にリダイヤルした。

コールの間、稲葉はぐるぐる頭を巡らせていた。

まだ解決してない事あるじゃない。あの赤い文字は・・・・？

「ひっっ・・・！」

声にならない声を出して突然稲葉はのけぞった。

カシーンと音を立てて携帯がテーブルに落ち、

ストラップが引っかけたコップが危うく倒れそうになる。

すんでの所で押さえ携帯は守られたが体中からどっと汗が噴き出した。

そして慌てて回りを見回す。

誰かが　お尻触った！

店内には今日も5～6組の客。

中年のサラリーマン、ずっとおしゃべりしている女性二人、
学生風の若い男、初老の老人、競馬新聞を読んでいる男。
特に変わった人物は見あたらない。

「どうしたの？稲葉さん。」

ナオが不思議そうにこっちを見ている。
稲葉はナオにそっと近づいて小声で聞いた。

「ねえ、最近変わったことない？変わったお客がよく来るとか。」

「かわったこと？そうねえ・・・。」

ナオは少し考えてハッとした表情を見せた。

「この前のあの二人は近頃よく来てくれるようになったのよ。」

「あの二人？」

「ほら、覗き趣味の向かいのビルの二人。」

「ああ・・・。」

「あの男の人、とっても二枚目でいい感じなのよね。

彼女の方はけっこうおしゃべりでね。やっぱりあなた達に興味津々で何かと聞かれたわ。
もちろん、変なことは言わないわよ。
それでね、その人達、ここの常連さんともすっかり仲良くなって・・・・」

「あ、・・あのね、その二人の話はいいから。・・ごめんね、ありがとう。」

「・・・そう？」

まだ話し足りなそうなナオだったが、ちょうどお客が入ってきたので残念そうにカウンターの中に入っていった。

・・・・気のせいか？

うん、気のせいだよな。

疲れてんだ、きっと。
もうすぐ二人も帰ってくるし、・・・・上にもどろう。

稲葉は少し鳥肌の立った腕をひと撫でして、深く息を吸った。

（つづく）

ファースト・ミッション　第5話

「あれ？稲葉、本当に残ってたんだ。」

事務所に入ると宇佐美は壁の一点をじっと見つめて座っている稲葉に笑いながら声をかけた。

「どうしたの？シロちゃん。顔色が悪いけど。」

李々子が宇佐美の後ろからひょいと顔を覗かせた。

稲葉はゆっくりと二人の方を向いてポツリとつぶやいた。

「位置が変わってる。」

「え？」

李々子と宇佐美が同時に聞き返した。

稲葉はまたゆっくりとした動きで壁に掛かっている二つの額を指す。

「あの二つの絵、位置が逆になってる・・・。」

宇佐美と李々子は壁を見た。

今までは対になって向かい合っていた黒い馬の絵が、今はそっぽを向いている。

昼間三人が出ていくまで変化は無かった。

「へえ、稲葉すごいね。よく気がついたね。」
「関心してる場合じゃないでしょう、宇佐美さん！
僕らが居ない間に誰かがまた入ったんですよ。鍵開けて。
入って、いじくって、また鍵閉めて！大問題ですよ！」
「鍵、変えなきゃな。」
「だからそういう問題じゃなくて！！」
「まあ、落ち付けって稲葉。で、何か取られたものは？」
宇佐美は可笑しそうに笑いながら言った。
「わかりませんよ。ひとつひとつ調べた訳じゃないですもん。
見た感じ、ファイルもデータも荒らされてないみたいですけど・・・。
」
「ふーん。私たちがいない時を狙って入ってるのね、いつも。」
李々子は回りをぐるりと見回している。
「問題はそこだな。何で居ないときが分かるのか。」
「見られてるみたいで気味が悪いわね。」
「そうなんです。僕も近頃いろんなとこで視線を感じるんですよ。」
「向かいのビルの人は近頃は覗いてないのかなあ。ブラインド閉ま

ってるし。
ちょっとがっかり。」
「なんでがっかりなんですか！・・・あ。そういえば。
あの二人、よく鳳凰に来てるんですって。ナオちゃんが言ってました。
ばったり会ったらどうしようかな。
なんだかここの話をやたらしてるらしいですよ、下で。」
「・・・・・・ん。」
宇佐美が何か思いついたようにゆっくり稲葉を見た。
李々子ももう一度壁の絵を見たあと宇佐美を振り返った。
「え？どうかしたんですか？」
李々子がすーっと稲葉の横に来てぴたりと寄り添うように座った。
「ねえ、シロちゃん。何か最近身の危険を感じるようなこと無かった？」
あまり近づくので李々子の胸が稲葉の腕に触れてくる。
居心地の悪さとは裏腹に急に上がっていく心拍数。
“今が危険な状態です”と叫びたくなるのを我慢して稲葉は声を絞り出した。

「そ・・・そういえば。さっき下でおしりを触られたような気が・・・。」

「やっぱり。」

李々子は宇佐美を見た。
宇佐美は小さく溜息をつく。

「え？どうしたんですか？」

「うん・・・。李々子、大きな紙持ってきて。」

「は～～い。」

李々子は古いカレンダーを一枚宇佐美の前に持ってきた。

“あれ？　この展開、以前見たぞ？”

稲葉は唖然として二人を見ていた。

宇佐美は太いマジックで紙に大きく文字を書いて
以前やったのと同じように外側から見えるようにガラス窓にバンと
貼り付けた。

紙には、

“まぎらわしいことしないで、出てきてくださいよ！”

と、書かれていた。

「え？え？どういう事です？」稲葉は二人を交互に見つめた。
そしてまたもや間髪入れずに電話のベル。
今度は宇佐美ではなく李々子が受話器を取る。
スピーカーホンにしたあと相手が話しかけるよりも先に大声で怒鳴った。

「またこんなイタズラして！いいかげんにしてよね、パパ！」

「パ・・・・・・・・・・・パパ？？」

稲葉は思わず大声を出していた。

宇佐美が少し苦笑しながら稲葉に双眼鏡を手渡して向かいのビルを指さした。
ブラインドが開いている。
慌てて双眼鏡を覗くと、窓際で白髪の初老の男がにこやかにピースサインをしている。

「あ！鳳凰にいた人だ！」

稲葉は唖然とした。

彫りの深い老紳士。ちょっとバック・トゥ・ザ・フューチャーのドクに似ている。
電話の向こうからは少し楽しそうに笑いを堪えた声が聞こえてきた。

『やあ、李々子久しぶり。宇佐美くんも元気だった？会いたかったよ。
李々子にひどい目に遭ってないかい？』

「余計なことはいいのよパパ！いったい何のつもり？
音信不通だったくせにいきなりこんな紛らわしいことして。
また何かやらかして帰って来たんでしょ。お金なら無いわよ。」

『ないの？』

「ないわよ！何？男にふられたの？それとも騙されて持ち逃げされたの？」

『なんでわかる？？』

「大体いつだって男見る目がないんだからパパは。」

稲葉は宇佐美の腕をぐっと掴み、説明を求めてすがるような目で見つめる。

宇佐美は少し笑って小さく稲葉の耳元でつぶやいた。

「ゲイなんだ。」

稲葉は固まった。

『ほーら、李々子はすぐ怒るだろ？だからそっちに顔出しにくかっ

たんだよ。
一週間前から帰国してたんだよ？
すぐにでも飛んでいって飛びつきたかったのに。』

「諒にでしょ？」

『もちろん。』

「殴るわよ。」
李々子が拳を握りしめてドスの利いた声を出した。

『だろ？だからこうやってこのロケーションを確保したんだ。
下の喫茶店でこの部屋の二人と意気投合しちゃってね。
ひと部屋空いてるから使っていいって言うし、甘えさせてもらったよ。』

「そういうのを“覗き”って言うのよ。教えといてあげるわ。
で、私たちが留守の間にこそこそ何やってたの？」

『いやあ、ちょっと私のへそくりをね、探して・・・』

「絵の中に入ってたやつ？ああ、5年くらい前に見つけて使っちゃった。何か文句ある？」

『あ、見つかっちゃった？・・・じゃあ仕方ないね。』

「大体パパはいい加減すぎるわよ！
諒に事務所押しつけて、男追いかけてアメリカ行ったまま音信不通で。
サイテーの男ね。あっちで何やってたのよ。諒だって心配してたの

に。
連絡先だって教えないし。一番諒が辛かった時になんで・・・・・
あ」

受話器を掴んでいた李々子の手の上に宇佐美がそっと手を重ねた。
李々子は驚いてピタリとマシンガントークをやめ、宇佐美を見上げる。

「もういいじゃない。ね。李々子。　電話替わって貰ってもいい？」

柔らかく笑った宇佐美に少しドキリとして李々子は無言で受話器を宇佐美に手渡す。
そして少し複雑な表情で稲葉の横に来てどすんと座った。
弾みで転けそうになりながらもなんとか体制を整える稲葉。
頭の中は疑問符だらけだ。

「アメリカに行ってそれっきりって、そういう意味だったんですか？
病気だっていうから、僕はてっきり・・・。」

「病気でしょ？あれは。」

「い、いや、まあ、ねえ・・・。」稲葉は苦笑い。

「お元気そうですね、卯月さん。お久しぶりです。」

宇佐美は落ち着いた静かな声で話し始めた。

それは李々子とはまったく違う、相手に敬意をもった話し方だった。

『連絡も取らないでごめんね、宇佐美くん。
でも忘れたことは無かったんだよ？ずっと。
この前ちかちゃんに会ってね、いろいろ教えて貰った。
しっかりやってくれてるってね。嬉しかったよ。
あの人に信頼されたんなら一人前だ。』

「・・・・そんなことないです。」

まるで先生に褒められて照れて困っている子供のような宇佐美の表情を
稲葉は不思議な気持ちで見ていた。

「そういえば卯月さん、あの赤いバッグのことはどうしてご存じだったんです？」

「そう！それ僕も聞きたかった！」思わず稲葉も身を乗り出した。

『ああ、あの朝意を決して李々子に声をかけようとマンションに行ったんだけどね。
やっぱりダメでずっと後ろをくっついて歩いてたんだ。』

「なによ、やらしいわね！」今度は李々子が噛みついた。

『そしたら駅のホームで知らない男の携帯をあのバッグにポンと入れて電車に飛び乗っただろ？
あんときの男の慌てぶりったら無くてね。
その後もしばらく李々子の回りをうろついてたみたいだから
返してやってくれっていう意味でメモを残したんだよ。』

「全部見てたんですね。」宇佐美が可笑しそうに笑う。
「まったく紛らわしいんだから。」李々子がムスッとしてつぶやく。

『宇佐美くん・・・・・。』

「はい？」

『あのね・・・・。』

急に改まった口調になった卯月。
宇佐美はスピーカーホンを解除すると声のトーンを落として話し始めた。

「はい・・・・ええ・・・・。大丈夫です。・・・・はい。」

宇佐美の表情が少し曇ったのを稲葉は黙って見ていた。
李々子をそっと見ると、李々子も浮かない顔。

・・・・僕に聞かれたらダメな話なんだ・・・・。

何か大事な。
僕の知らない話。
入り込んではいけない事だってきっとあるんだろう。

・・・というか、自分はまだ何一つ入り込ませてもらっていない気がする。
仕事だって、プライベートだって。
僕は。
僕はまだ部外者なんだろうか。
何の役にも立てないんだろうか。

李々子まで黙り込んでしまった。
何とも言えず落ち着かない気分になり、稲葉はなんとなく双眼鏡で宇佐美と電話中の向かいのビルの卯月を見た。
見えているのだろうか。卯月も稲葉の方をみてウインクした。
“ぶっ”と思わず吹き出してしまう稲葉。
楽しい人だな。
そう思いながらまだ宇佐美と真剣な話をしている卯月を見ていた。
今度は何を思ったのか卯月は横を向いて自分のお尻を軽くポンポンと叩いて見せた。
「・・？」
稲葉は首をかしげたが、やがてハッとさっきのことを思い出した。
やはりあの時おしりを触ったのは卯月さんだったんだ。

でも、なんで？　ゲイだから？

稲葉は自分のお尻をなんとなく触ってみた。

「あれ？」

ポケットに何か入っている。
今まで気がつかなかった。
急いで取りだしてみる。
小さな紙片にやさしいきれいな文字が並んでいる。

「・・・・・・・・・・・・・。」

ちょうどその時宇佐美が電話を終えた。

「あ、李々子。替わらなくてよかった？切っちゃったけど。」

「一生、替わらなくていいから。」

「そんな毛嫌いしちゃ可愛そうだよ。いい人なのに。」

可笑しそうに笑う宇佐美。

「そそのかされちゃダメよ。ただのエロじじいなんだから。」

また小さな子供みたいに李々子は口を尖らす。

稲葉は黙って二人を見ていた。

「もう今夜アメリカに発つって言ってたよ。会わなくていいの？」

「いいのいいの。二度と帰って来るなって言っておいてもらえばよかったわ。」

「また酷いこと言うな。」

「それより諒、今夜いい？」

「え？何？」

「言ったでしょ？今夜ここに泊まってもいいって。」

「は？　何言ってんだよ。あれは違うだろ？」

「違うって何よ。あ、約束破るんだー。ウソつくんだー。ずる～～～い。」

「バカかお前は！！小学生か！」

「シロちゃん、聞いた？ねえ、諒ったらずるいわよね～～。」

どっちもどっちな子供っぽい言い合いを始めた二人を稲葉は少し戸

惑うような気持ちで見ていた。

向かいのビルにはもう人影はない。

稲葉はもう一度その紙片の文字を見つめた。

『どうか　あいつの側にいてやってほしい。

君に　助けてほしい。』

・・・・・あいつって誰だろう。

李々子さん？

まさか。良く知らない男に娘を頼むなんて普通言うわけがない。

じゃあ、宇佐美さん？

まさか。

何だって完璧にこなしてしまう宇佐美さんの何を助けるって言うんだ？

僕なんかが。

ありえない。

わからないよ、卯月さん。

宇佐美は李々子に付き合うのに飽きたようにＰＣを立ち上げ仕事モードに入った。
遊びを途中で切り上げられてしまった李々子は拗ねた子供のようにムッとした顔で自分のデスクに戻っていった。

・・・だけど　卯月さん。

稲葉はその紙片を大事そうにまたポケットに仕舞い込んだ。

これは僕に宛てた“依頼書”なんでしょうか。

だったら僕はがんばります。

手探りだけど、まず側にいてあげることから始めます。

僕に来た最初の仕事。

そして何より、

僕はこの二人が大好きだから。

つづく（「ファーストミッション」終）

あの月が満ちるまでに　第1話

「ようし、いい子だ。おとなしくしてろよ。僕だって手荒なことはしたくないんだ。」
稲葉はその艶やかな背中をそっと撫でた。

これが美女相手なら様にもなるが、稲葉の腕の中でじっとしているのは
一羽の灰色のオウムだった。

１０日ほど前に事務所にやってきた金持ち風のツンとした老女。
彼女はラビットに逃げたオウム探しを依頼してきた。
他にややこしい仕事を抱えていた宇佐美は渋る稲葉にこの仕事を全面的に任せた。
稲葉は「押しつけだ」と抗議したが。

「ポーちゃんは気に入った言葉なら1～2回聞いただけで覚えてしまう天才オウムなんですよ。
5回もＴＶの取材を受けてましてねえ。知らない？まあ、そう？
とにかく大事な大事な私の宝物なんですの。」

甲高い老女の声がちょっとカンに触ったが依頼は依頼。
この１０日間、稲葉は時間の許す限り近辺を探し回り、ようやく先程捕獲に成功したのだ。
任務を無事完了した嬉しさに稲葉は上機嫌だった。
事務所から近い場所だったため、稲葉はその収穫を腕に抱き、
さっきの言葉をくり返しながら事務所まで歩いた。

意外とおとなしい“ポー”を腕に乗せたままエレベーターを降りた

稲葉は
一瞬足を止めた。
部屋の前で宇佐美と知らない女が何やら深刻な顔で向き合っていた。
女は宇佐美と同い年くらいだろうか。知的で物静かな印象の人だった。
女は無表情のまま、くるりと宇佐美に背を向けてエレベーターに向かおうとする。
その腕を宇佐美が掴んで引き留めた。なぜか思わず隠れる稲葉。
「本当に行くつもりなのか？」
その表情はよく見えなかったが今まで聞いたことのない思い詰めた宇佐美の声だった。
「もう決めたから。どうかもう、忘れてください。」
やはり無感情な女の声。
「もう、会うなと言うことか？あの子にも。」
「ごめんなさい。もう忘れたいのよ。何もかも。」
“・・・きっと聞いてはいけない話なんだ。どうしよう。”
稲葉は少しオロオロしてエレベーターの方へ後ずさりした。
けれどその時、バッドタイミングで腕の中の小悪魔はさえずりだした。
『イイコダ　ヨシ　オトナシクシテロヨ！　イイコダ　オトナシク

シテロ』

シンとしたフロアに場違いな、けれど完璧な復唱が響いた。
言わずもがな。ヒョイと覗き込んだ宇佐美に見つかってしまう。

「何してんだ？稲葉。いつからそこに居た？」

別にとがめるわけでもなく、いつものトーンで宇佐美は稲葉に聞いた。
だが稲葉の腕の中に居る物を見て全てを把握し、少し笑顔になる。

「あ、やったな、稲葉。オウム捕まえてくれたんだ。」

「そ、そう。ついさっき、そこで！だから今！たった今来たばかりなんです。ほんと！」

声が思わず上ずった。焦っているのはバレバレだ。
宇佐美はそんな稲葉を見ておかしそうにまた笑った。
けれどもいつもの宇佐美とは違う。稲葉はなぜかそう思った。

「さようなら。」

そう言うと宇佐美の前を横切り、女はエレベーターの方へ歩いて行く。
複雑な表情で女の後ろ姿を見つめる宇佐美。
でももう、引き留める事はしなかった。
エレベーターのドアが閉まり、女は二人の視界から消えた。
微かな機械音だけが残る。
稲葉はまだドアを見つめて立っている宇佐美に何て声をかけて良いのか分からず

ただ腕の中の鳥の背を撫でた。

『イイコダ　ヨシ　オトナシクシテロ。　イイコダ　ヨシ　』

思わず稲葉はオウムの口を押さえた。

「いったい何を教えてんだよ稲葉！あの依頼人怒るぞ、そんな言葉覚えてきたら。」

宇佐美が稲葉を見ながら可笑しそうに笑い出した。いつもの彼だ。

「だってこいつ本当に1～2回聞いたら覚えちゃうんですもん。僕のせいじゃないですよ。」

「天才オウムだな、本当に。でもありがとう、助かったよ見つけてくれて。

悪いけど俺出かけるから留守番してくれるかなあ。もうすぐ李々子も帰ってくると思うし。」

そうか、李々子さんは出かけてたんだ。

稲葉はなぼかホッとしたようにオウムの頭をなでた。

事務所に戻り用意をしたあと宇佐美は別段いつもと変わらない様子で出かけて行った。

オウムの飼い主が用意してくれていた鳥かごにオウムを移すと急に疲れが押し寄せて

稲葉はソファに沈み込んだ。

なぜか頭の中でさっきの二人の会話がグルグルまわっている。

“あの女性は宇佐美さんのなんだろう。

李々子さんなら知ってるんだろうか。まあ、・・僕には関係ない事だけど。”

ボーッとそんなことを考えているうちに眠気が襲ってきて
稲葉は心地よい昼下がりの窓辺で目を閉じた。

「へんな顔してるね、この鳥。」

ピンと張ったちょっと強気な口調のその声に稲葉は飛び起きた。聞き覚えの無い声。

「・・・え？」

ソファからずり落ちそうになる。
目を凝らすと窓際に吊した鳥かごの前に一人の少女が立っていた。
中学生？いや、高校生くらいだろうか。
スラリとした体、長い足、透き通るような白い肌。
まだ肌寒い季節だというのにノースリーブにドキリとするほどのショートパンツ。
長い栗色の髪はゆるくウエーブして艶やかに肩にかかっている。
まるでモデルのようなその少女はぐるりと部屋を見渡すと稲葉を見おろして言った。

「ねえ、宇佐美、いる？」

「・・・・・は？？」

まだ頭がすっきり目覚めていない稲葉は、その横柄な質問にすっと

んきょうな声を出した。

「ねえ、宇佐美いないの？」

「宇佐美って・・・君ねえ。
なんで年上の人を呼び捨てにするの？親戚の子か何か？
それにしても感心しないな。事務所に勝手に入ってくるのもどうかと思うよ？」

「うるさいなあ。おじさんこそ誰よ。
宇佐美はそんな事言わないよ。説教する男、大嫌い。モテないよ、おじさんみたいな人。」

「なっ・・・・・！」

長年女子高生を相手にしてきた稲葉だが、さすがに頭の中で何かがブチブチ切れかけた。
けれど少女は気にもしていない。

「ああ、新しく入ってきたバイトさん？
ふーん、そうなの。でももっと若い人入れればいいのにね。どうせなら。」

「がっ・・・・・。」

「あーあ、せっかく久しぶりにこっちから会いに来てあげたのに。
宇佐美いないのね、残念。服だって気合い入れて来たのに。ねえ、バイトさん、私どう？色っぽい？」

少女はモデル立ちして稲葉にニッコリ微笑んだ。

「き、君ねえ。」

“いったいどういう育てられ方したんだろう。”

稲葉は唖然としたまま少女を見つめた。

こんなに若いのに宇佐美に好意を持っているんだろうか。

李々子のように？

そうなのか？

「ねえ、バイトさんったら。」

「バイトバイト言うな。稲葉っていうんだ僕は。」

「ねえ、稲葉。」

「いきなり呼び捨てかよ！」

「私いくつに見える？」

「は？」

「ねえ、いくつに見える？」

「・・・・・」

まるで飲み屋で三十路の女にされるような質問だと思った。

稲葉はますます妙な感覚を覚えた。

「いくつに見えるって・・・１５～６歳でしょ？」

「えー、そのくらい？１７～８に見えると思ったんだけどな。」

「見えなくもないけど・・・本当はいくつなの？」

「１２歳。あと数日で１３歳。」

「１３？・・うそ。」

１３には見えなかった。

まじまじと少女の体を眺めてしまっている自分に気付き、稲葉は目をそらした。

「まだ足りない・・・」
「ん？」
「早く大きくならなきゃ。」
「どうして？」
「どうしても。」

稲葉は少し混乱しながら少女を見つめた。
“いったいこの子は何だろう。宇佐美とどんな関係だろう。
さっきの女性と何か関係があるんだろうか。
もうじき１３歳。
３４の宇佐美を好きになる年齢じゃないよな。まるで親子じゃないか。
・・・・え？　親子？”

「ねえ。稲葉さん。」
ガラス窓に貼り付いて空を眺めながら少女がつぶやいた。

「なに？」

「かぐや姫の話、知ってる？」

「かぐや姫？ああ、もちろん知ってるよ。竹から生まれた女の子でしょ？」

「そう。満月の夜に月に帰っていくのよね。」

「うん、そうだけど。」

稲葉はそんな話をし始めた少女を不思議そうに見つめた。
「行かないでくれって言う男達に絶対解けない難問を出してね。男達が苦しむのは分かってるのに。すごく意地悪な女だと思わない？」
「まあ、そう言われればね。」
「でも、何か分かる気がするんだ、私。」
「・・・ふうん。」
「もうすぐ満月なの。」
「え？」
「あと４日で満月の夜が来るの。私ね、宇佐美にそれを伝えに来たのよ。」
少女は１３歳とは思えない意味深な微笑みを浮かべて再び窓の外に視線を移した。
その少女がいったい何を考えているのか稲葉にはまるで分からなかったが、
ただならぬ強い意志を感じてゾクリとした。
カチャリと後方でドアが開いた。
「シロちゃーん、来てる？オウム捕まえたんですって？諒からメールがあったのよ♪」

いつもの脳天気な李々子の声。
妙な空間から解放されたようで稲葉はなんだかホッとした。
けれど少女の姿を見た李々子の顔から笑顔が消えた。
「・・・・マユカちゃん。」
李々子は急に声のトーンを落として少し慌てたように笑顔を作った。
「お久しぶり、李々子さん。」少女もニコリとする。
「残念だけど諒はいないわよ。夜になると思うけど。・・・ここで待つ？」
「待たれても困るでしょ？いいよ、また来るから。」
「そう？気をつけてね。」
一見何気ない会話だった。
けれども何ともピリピリとした居心地の悪いモノを感じて稲葉はソファに沈み込んだ。
幾分強めにマユカがバタンと事務所のドアを閉めて出ていったので鳥かごの中でポーが少し驚いたようにしきりに首を傾げる。
『キヲツケテネ、キヲツケテネ。』
タイミングなどお構いなしに気まぐれに真似るポーの言葉だけが寒々しくしく部屋に響き渡った。

（つづく）

あの月が満ちるまでに　第2話

「面白いわね。本当にすぐ言葉、覚えちゃうのね、このオウム。」
李々子は興味深げに鳥かごの灰色のオウムを覗き込んでいる。
けれど稲葉はそんなことよりも李々子に聞いてみたい事が山ほどあった。
もちろん宇佐美と話していた女性の事もそうだが、さすがにそれは聞きにくい。

「ねえ、李々子さん。」
「なあに？」
「さっきの女の子って、誰なんです？ずいぶん宇佐美さんと親しそうだったけど。」
「ああ、マユカちゃんね。」
「マユカちゃん？」
「相変わらず生意気な子よ。ちっとも変わらない。
でも色気だけは付いてきてさ。女の子は怖いわね、まったく。」

少し憎らしげに李々子は口を尖らす。

「昔から知ってるんですか？宇佐美さんの親戚とか？」
「しんせき？」
「違う？」
「さあ・・・・どうなのかしらね。」

あれ？

稲葉は李々子の表情をチラリと見て首をひねった。

この表情。話の確信に触れないようにはぐらかすしゃべり方。
以前宇佐美の過去を聞いたときと同じ反応だ。
稲葉は思い出してハッとした。
“この話には触れないようにしよう。あの時そう思ったはずだ。
あの少女はその話したくない過去に繋がってるんだ、そうに違いない。
触れないようにしなくては。
けれど・・・・。けれど、それでいいんだろうか。”

「今夜は月がきれいね。」

ガラス窓に手を当てて子供のような格好で李々子がつぶやいた。
すっかり暮れてしまった空に月が浮かんでいる。
まだ満ちきっていない上弦の月。

「遅いわね、諒。」
「え？」

月を見たままポツリとまた呟く李々子。
宇佐美が出かけるのはいつものことだし、まだ7時。少しも遅い時間ではなかった。

あのマユカという少女のせいだろうか。
いつもスキあらば訳もなくスキンシップをはかってくる『お色気お姉さん』な李々子は
ここには居ない。
少し寂しげな李々子に何と話しかけて良いか分からず、稲葉はただ

黙って一緒に月を見上げた。

「え～、あのおばあさん、長期旅行に行っちゃったんですか？
どうすんですかこのオウム！」

次の土曜日。すねたような稲葉の声が事務所に響いた。
分厚い書物を読んでいた宇佐美は苦笑しながら稲葉をなだめた。

「仕方ないだろう？本当に見つけてくれるとは思ってなかったんじゃない？
でもすごく喜んでたよ。お礼は弾むって。そのかわりあと3週間よろしくってさ。」

「よろしく、じゃないでしょう！」

『ヨロシク！ヨロシク！』

鳥かごの中でポーがご機嫌に繰り返す。
堪えきれずにクスクスと笑う宇佐美。

「笑ってないで！宇佐美さん。大変なんだから。いっぱい食うし。
うんちするし。ちらかすし。ペットホテルじゃないんだから！」
「ペットホテルだよ？」
「ええっ？？」
「だって、何でも屋だもん。」
「う・・・」
「探偵事務所だと思った？」

「ぐ・・・・・・」

宇佐美は可笑しそうに笑いながら本を机に伏せて今度はＰＣ画面をじっと見つめ、
何やら調べモノをしている。
昨夜からずっとこんな調子だった。
本が医学書だと言うことしか稲葉にはわからない。

「何かの依頼ですか？」何気なく稲葉は尋ねてみた。

「・・・・・・・」

“・・・・無視か？”

けれどしばらくして

「・・え？何か言った？」と、宇佐美は顔をあげた。

「どんだけ集中してんですか。何か調べモノですか？」

「ああ、・・・・・うん、ちょっとね。」

「・・・ちょっと？」

「うん・・・・。」

パソコンの画面を見てつぶやいた後、宇佐美はもう一度稲葉の方を見て口元だけで少し笑って見せた。

取り繕った笑顔。

稲葉はそう思った。
正直な人だ。
『これ以上聞かないでね』
一瞬の笑顔で彼はそう伝える。
軽い拒絶。
“なぜだろう”
一瞬めまいを覚えた。
昨日、李々子の横にいた時も感じた、同じ感覚。疎外感。

『君に助けてほしい。』

“・・・助ける？僕が？誰を？とんでもないです、卯月さん。
僕は無力です。あなたの依頼は遂行不可能です。・・・・”
ぼーっと立ち尽くしている稲葉の横で、グレーのオウムはしきりに首をかしげている。
稲葉は鳥に気持ちを見透かされているようで、ますます悲しい気持ちになった。
「李々子、オウムの餌買いに行ったまま帰ってこないなあ。」
独り言のように宇佐美がつぶやいた。
「・・そうですか。」

稲葉は答えるともなく返す。

「迷ってるのかな。」

「さあ。」

「すぐ迷うんだ。」

宇佐美はまたつぶやくように言うと、ほんの少し笑う。
稲葉はすこし妙な感覚を覚えて宇佐美をみつめた。

「この事務所を閉めるって言ったら、あいつ怒るかな。」

「え！？」

あまりにも唐突だったので稲葉は思わず大きな声を出してしまった。

「宇佐美さん！それ・・・・」

その言葉をさえぎるようにドアが勢いよく開いた。

「宇佐美、いた！」

無邪気な声を出してマユカが飛び込んできた。
黒いタイトなミニのワンピース。長いスラリとした足が強調されている。

「マユカ・・・・」

一瞬凍り付いたような宇佐美の表情。

「一昨日も会いに来たのにどこ行ってたの？」
「おととい？」
「あれ？このバイトさんに聞かなかった？」
「バイトさんって・・・ひどい。」
ムッとする稲葉。だがマユカはおかまいなしにヒラリと宇佐美に近寄る。
「私から会いに来ちゃだめなの？」
「そんな事ないよ。」
「じゃあもっと嬉しそうな顔しなさいよ。」
「・・・マユカ。」
辛そうにマユカを見つめる宇佐美。
稲葉は唖然として二人のやり取りを見ていた。
「3カ月ぶりだけど、私少し大きくなったでしょ？ね、大人っぽくなったでしょ？」
「うん、そうだね。」
「抱いてみる？」
「・・・え？」
「昔みたいに抱き上げてみてよ。」

稲葉はじっとり汗をかきながらこの奇妙なやり取りを聞いていた。
「そんな事しなくてもわかるよ。３カ月ごとにチェックしてるだろ？」
宇佐美は曖昧に笑いながらＰＣの画面を消し、読んでいた本をそっと引き出しに隠そうとした。
「なあに？」
目ざとく見つけてマユカが本に飛びつく。
宇佐美の手から医学書を奪い取ると、まるで憎らしいモノを見るように
いきなり床に投げ捨てた。
「おい！何してんだよ、あんた！」
稲葉は咄嗟にマユカに怒鳴った。
もう何だかムカムカしてじっとしていられなくなった。
「稲葉・・・いいから。」
「いいからって・・・。何で！」
「ほらね。いいって言ってるでしょ？」
マユカが小悪魔のような笑みを向けてきた。
「だって・・・・宇佐美さん！」

『ダッテ！　ホラネ！　ダッテ！』

ポーが緊張を感じ取ったのか、珍しくカゴの中で騒ぎ出した。
マユカは一瞬ニヤリとしてその鳥かごに近づく。

「あ、こら！何すんだよ！」

けれど遅かった。
マユカが開けた小窓から今まで緩慢だったポーが滑るように飛び出し、部屋中を飛び回った。

「わーー！こら、戻れポー！こっち来い！」

呼ぶ声も空しくポーはほんの少し開いていた窓から矢のように外に飛び出してしまった。
１３階の空中を気持ちよさそうに飛び回るポー。
稲葉は愕然としてしばらくそれを見ていたが、急に沸き立ってきた怒りにまかせて
マユカを振り返った。

「あんたなあ！」

「気持ちよさそうに飛んでたじゃない。翼があるのにこんなカゴの中に閉じこめてちゃ
かわいそう。解放してあげなきゃ。」

「勝手なこと言うな！宇佐美さん、なんとか言ってくださいよ！」

けれど宇佐美はやはり辛そうな表情のまま、カラになった鳥かごを

見つめて黙っている。

「宇佐美さん！」

「ほらね。怒られないでしょ？私悪いことしてないもん。
閉じこめて眺めてるなんて残酷だもの。ね。そうでしょ？」

「マユカ！！」

そう叫んだのは宇佐美ではなかった。

いつの間に帰ってきていたのか、ドアの前に李々子が立っていた。
その表情は冷ややかだったがとても落ち着いている。

「李々子さん。」安堵したようにつぶやく稲葉。

「マユカちゃん。もう帰ってくれる？ここは子供の遊び場じゃないの。分かるでしょ？」

しきりにうなづく稲葉。

「・・・・。」

ほんの少し李々子を睨むように見た後、マユカはゆっくりとドアに近づいた。

「つまんないの。」

小さな子供のようにつぶやくと、マユカは李々子の横を通り抜けた。

「また遊びに来るから。」そう一言付け足して。

部屋は急にシンと静まりかえった。

「な・・・・な・・・何なんですか、あの子は！

いったいどんな育て方をしたらああなるんだ？ねえ、宇佐美さん。

あの子はいったい誰なんですか。」

堪えきれずに稲葉はそう叫んでしまった。

けれど宇佐美はどこか一点を見つめてだまりこんでいる。

やはり答えは返って来ない。

ただ、同じように辛そうな表情でそっと近づいてきた李々子が

稲葉の耳元で小さくつぶやいた。

「あの子は・・・・・諒の十字架なの。」

（つづく）

あの月が満ちるまでに　第3話

「なあ、お前にはわかるか？ポー。」

次の朝。エレベーターの中で稲葉はポーを腕に乗せたままぼんやりつぶやいた。

オフィスビルのすぐ側の木でポーを見つけた稲葉は、名前を呼ぶだけで難なく捕獲に成功した。

けれど今朝は昨日のことが引っかかっていてなかなか気分が浮上しない。

『あの子は諒の十字架なの。』

『この事務所閉めるって言ったら、あいつ怒るかな。』

『ねえ、抱いてみる？』

いろんな言葉が脳裏を巡る。

「あのマユカって子はどういう子なんだろうな。」

聞いてみても灰色のオウムは首を傾げるばかり。溜息混じりに笑ってエレベーターを降り、

事務所の前まで来た稲葉は立ち止まった。

ドアが開いたままになっている。李々子なら閉めるはずだ。

李々子以外の誰かがいる。

稲葉はそっと音を立てないようにして中を覗き込んだ。

朝のやわらかい陽射しを背にして宇佐美が机に伏せるように眠って

いた。
昨夜も遅くまで起きていたのだろう。その表情は少し疲れているように感じられた。
そしてそれを見つめている幼い横顔。

マユカだった。

机の横に小さな椅子を持ってきて座り、じっと静かに宇佐美を見つめていた。
その表情は昨日の小悪魔的なものとは別人の、
やわらかい、優しさに満ちた母性の様なものを感じさせた。
“・・・ああ、この子は宇佐美を愛している。どんな形であるにせよ、それだけは確実だ。”
稲葉は軽い逆光の中、そのまだあどけない横顔をただ見つめていた。

少女はゆっくりと腰をうかせて顔を宇佐美に近づける。
鼻先が触れるくらいに。稲葉のところからは見えないが、頬にキスしたのかもしれない。
そしてほんの少し体を放すと左手でそっと眠っている宇佐美の髪をなでた。

不思議な光景だった。
胸がザワザワするのに、シンとした神聖な感覚。

マユカの指が頬にかかる。

宇佐美はゆっくり目をあけた。

「・・・・マユカ？」

まだ少しぼんやりしたかすれた声で言う。

「おはよう。こんなとこで寝てたらあの女に襲われちゃうよ。」

マユカは体を離しながらちょっと意地悪そうに微笑んだ。

それには反応せず、一つ伸びをする宇佐美。

二人はどんな会話をするのだろう・・・稲葉は少し緊張して聞き耳を立てた。ところが、

『オソワレチャウヨ、オソワレチャウワヨ。』

何がツボだったのか、またもや稲葉の腕の中でポーが復唱した。

驚いたように稲葉の方を振り向く二人。

「あ・・・・・・お、おはようございます。」

何てバッドタイミングなんだ。稲葉は自分の不運を呪った。

「稲葉。・・・ああ、オウム見つけてくれたんだね。良かった。ありがとう。」

ニッコリと笑う宇佐美。

「なんだ、バカな鳥ね。もう帰って来ちゃって。」

マユカの言葉にムッとする稲葉。

「君はあれかい？ごめんなさいとかいう言葉を知らないのか？」

「うわー、ヤダ。学校の先生みたいな事言ってる。」

「学校の先生なんだよ！悪いか！」

「えー、うそ。先生がなんでいつも遊びにきてんの？」

「遊びにって・・・。宇佐美さん！なんとか言ってくださいよ。」

助けを求めるように宇佐美を見たが、宇佐美は少し困ったように笑っているだけだった。

「宇佐美に言いつけたって無駄よ。宇佐美はぜったい私を叱ったりしないもん。」

「え？」

「一度だってないもん、私が何したって。なんだって言うことを聞いてくれるし。」

「・・・どうして？」

「どうしてだか聞きたい？」

稲葉は宇佐美を見た。

「マユカ・・・。」

辛そうに言う宇佐美。

「わかってる。ママが心配してるからもう帰るわ。でも一つだけ宇佐美に宿題を出しておく。
明日は満月なの。一年で一番綺麗な満月。その夜、私の一番望むモノを私にちょうだい。」

「一番・・・望むもの？」

「そう。まだ宇佐美が私にくれたことの無いもの。」

「・・・・・。」

「もしそれをくれなかったら・・・私のこと、世間にバラす。」

「な・・・・。」

宇佐美は絶句してマユカを見た。

「ジョーダンだと思ってるでしょ？本気なんだから。試しに稲葉さんに話しちゃおうかな。」

「そんな事して何になる。」

「宇佐美が困る。」

「マユカ。」

「私は平気だもん。」

「そんなに・・・俺が嫌い？」

悲しげに言う宇佐美に少しハッとしたように体を強ばらせるマユカ。
「言ったでしょ？私がほしいモノをくれればいいのよ。そしたら私、何もしない。」

“・・・満月・・、望むモノ・・・・手に入らないプレゼント・・・・”

かぐや姫だ。　稲葉は思った。

意地悪な、残酷なかぐや姫。

男達はただただ姫を愛し、側に居たかっただけなのに。
プレゼントを手に入れるために命を落とすかもしれないと言うのに。
あえて、その愛を試そうとするかぐや姫。
たとえ、それを探し出して男が愛をささやいたとしても・・・・

「結局は、月に還るの。」

マユカはまるで心の中を読み取ったかのようにニヤリと笑って稲葉を見つめた。

「かぐや姫。・・・・竹から生まれた女の子。」

そして少し笑いながらマユカは稲葉にゆっくり近づいてゆく。

宇佐美はハッとしたようにマユカを見た。

「貴方には教えてあげる。宇佐美と親しそうだから。・・・あのね、
私もそうなのよ。」
「え？」
稲葉は至近距離まで近づいたマユカの目を見つめた。
「私は竹じゃなくて小さなガラス瓶の中。」
「マユカ、やめろ！」
初めて宇佐美がマユカに対して声を荒げた。
けれどまるで聞こえていないかのように少女は稲葉にささやいた。
「私は宇佐美に作られた実験動物。　クローンなの。」
「・・・・え？」
稲葉は一瞬意味が分からなかった。
・・・この子は何のジョーダンを言っているんだろう。
たいして面白くもないジョーダンを・・・
けれど、青ざめて愕然としている宇佐美を見て初めてそれがジョーダンでない事を悟った。
“どうしよう、卯月さん。
貴方からの依頼は、僕には荷が重すぎます。”

（つづく）

あの月が満ちるまでに　第４話

マユカが帰って行った後も、部屋に立ちつくす二人。
何と切り出してよいか分からず、稲葉はただ宇佐美の青ざめた横顔を見ていた。

「ごめん、稲葉。・・・帰ってくれないか？」

窓の外を見ながらポツリと宇佐美が言った。

“ただ。　軽い拒絶。”

「話しては貰えないんですか？」

「え？」

「僕にだって、何か考えさせてください。」

「考える？」

「そう。」

「何を？」

「あなたが少しでも楽になる方法を。」

稲葉は場違いなほどニコッと笑って見せた。

「こう見えても何でも屋の弟子ですから。」

そう言ってまた笑う稲葉を宇佐美は柔らかい表情で見つめた。

「俺が楽になる方法なんて・・・・考えたこともなかった。」

「そうだろうと思った。だからあの人も心配して・・・・」

「あの人？」

「いえ、いいんです。・・・話してもらえますか？宇佐美さん。」

「長い話になるよ。」

「いいですよ。」

稲葉がデスクチェアを引き寄せて座ると、宇佐美も自分の椅子に座った。

両肘をつき、ゆるく組んだ手を口元によせる。

そして記憶を辿るように一点を見つめたまま、宇佐美は話し始めた。

「大学の医学部で俺がやっていたのは再生医療の研究だった。

移植ではなく、患者本人の未分化細胞を使って人体の部品を作る研究なんだけど、

当時はまだ血管や皮膚の実用までしかたどり着けていなかった。

けれどそのうち受精卵から作る『ヒトＥＳ細胞』の作成の成功により、

すべての臓器の再生が夢ではなくなったんだ。

バックボーンが大きく、予算も降りたその医学部で俺たちのグループはその研究にのめり込んでいった。

けれど研究を重ねるうち、その『ヒトＥＳ細胞』の弱点が見えてきた。
移植した場合の拒絶反応だ。そして受精卵を使用するという倫理面での問題。
これらをクリアするためにそれこそ昼夜を問わず研究に時間を費やした。

そして、俺はその解決策に辿り着いた。
ヒトクローン胚からＥＳ細胞を作る方法だった。
患者自身の細胞と女性の未受精卵によって作られたクローン胚を胚盤胞まで育ててそこからＥＳ細胞を作る。
このＥＳ細胞を分化させて臓器を作れば、それは患者自身の細胞なのだから拒絶反応はまず起こらない。
受精卵を使うという倫理面の問題もクリアできるんだ。」

「す、すごいですね。」

何とか話についていこうとして稲葉はデスクに身を乗り出すようにして聞き入った。

「でも・・・・。
俺のレポートを元に実験を進めていくうちに、
当然最初に気付かなければならなかった問題点に最終段階でやっと気がついた。」

「問題点？」

「ヒトクローン胚は、それを壊してＥＳ細胞を作り出すのであれば何の問題もないんだ。
けれど胚をそのまま子宮に入れて着床させ育てるとクローンとして

成長してしまう。
当たり前の事だったのに重視していなかった。
だって・・・・。
俺たちの研究目的は再生医療なんだ。
そんなことしようと思う人間が仲間にいるなんて考えもしなかった。
」
宇佐美の言葉は誰かに、というよりも自分に向けての怒りを感じさせた。
「誰かが・・・やってしまったんですね。」
稲葉は小さな声で言ってみた。
「医学部についていたスポンサーの中に多臓器不全の患者を家族に持つ人がいてね。
一部の研究員だけに、その身内の臓器を作って非公開で移植してほしいと依頼してきた。
莫大な予算を提示して。
実験結果を正式に提出する前にそんな事をするのを俺が許さないのは分かっていたんだろう。
そいつらは秘密裏に実験を進めていた。
でも・・・。
まだそこまでならなんとかなったんだ。」
宇佐美の声が少し辛そうに途切れた。
「・・・彼らの研究者としての欲望と冒険心が倫理観を狂わせてしまった。
彼らはＥＳ細胞を作るのとは別に、胚盤胞まで育ったヒトクローン

胚を
グループの中の一人の女性の子宮に戻した。」
「それって・・・・。」
「それがマユカだ。」
宇佐美はじっと一点を見つめながら言った。
「でもそれって、宇佐美さんのせいじゃないじゃないですか。
その仲間のやったことでしょ？」
「・・・そうじゃない。」
「そうじゃなくないですよ！
あなたが何でそこまで思い詰めるのか分からないよ。
悪用される可能性に気が付かなかったからですか？そんなのおかしいよ。」
「俺も同じなんだ。」
「何が！」
「俺も同じ欲望を持っていた。」
「・・・・・え？」
「彼らの計画に気が付いたのは着床後５６日。まだ止めようと思えば止められたんだ。

だけど母体を気遣う事をさも正当な理由に掲げて実験を中止させなかった。
クローンという生命体についてのデータも把握してなかったというのに。
本当は・・・。
本当はその生命にどうしようもなく興味を抱いてしまったんだ。」

「宇佐美さん・・・。」

「これは俺の罪なんだ。」

「・・・・・。」

「以前笹倉に偉そうに言ったけれど、何も違っちゃいない。
俺も最低の人間なんだ。医学者として生きて行く資格はないんだ。」

「それで大学院をやめたんですか？」

「・・・・・。」

「その計画を実行した仲間はどうして責任とってないんです？」

「あいつは・・・その依頼者が実験結果を待たずに亡くなったのを期に
その予算を持って消えてしまった。二つの結果も見ずに。
研究よりも金の魅力に負けたんだと思う。」

「最低だな。」

「女性の方は・・・今のマユカの母親だ。

ずっと愛情を持って育ててくれている。」

“あの時の女性だ”　稲葉はそう思った。

「でも、マユカちゃんだってあんなに元気できれいな女の子に育ってるんだし。
あなたが一生を背負う必要はないんじゃないかなあ。」

「一生・・・。あの子が生きている間ずっと、俺は苦しまなきゃいけないんだ。」

「どうして。」

「あの子は生まれたとき、すでに人生の半分を終えていたんだ。」

「・・・・・・え？」

“なに？どういうこと？”

稲葉は宇佐美を見つめながら、まだまだ深い苦悩の闇へ自分も引きずり込まれてしまう感覚に陥り、
手を握りしめた。

（つづく）

あの月が満ちるまでに　第5話

「テロメアって聞いたことあるだろ？」

「いえ。」

稲葉は素直にそう言った。

「その存在が一般に知られるようになったのはつい最近だけど、医学界で確認されたのはマユカが生まれて2年目だった。その頃はまだ罪の意識を感じながらも研究室に残って彼女の健康管理を続けてた。彼女はとても健康体でね。その面では安心していたんだ。でも、そのテロメアの存在を知って愕然とした。」

「何なんですか？それは。」

「ひとことで言えば人間の寿命を決めてしまうＤＮＡなんだ。正常な細胞が分裂する際、その染色体の末端にあるテロメラーゼが短くなって細胞が老化しやがて分裂できなくなる。それが細胞の・・・つまりは人の寿命と言ってもいい。つまりテロメアのせいで細胞は分裂出来る回数を決められているんだ。２０歳の人よりも５０歳の人の方が残された時間が少ないのは当然ということになる。そして・・・あの患者の女性は当時すでに３８歳だった。」

「つまり、その細胞をスタートとして生まれたマユカちゃんの細胞

はすでに
３８歳だったってことですか？」
「外見的には分からなくても・・・・そういうことなんだ。」
「知ってるんですか？本人は、その事を。」
「・・・・うん。知ってしまった。」
「・・・・・。」
「こんな罪、許せると思うか？」
「・・・その時、やめたんですね。大学院を。そしてここに来た。」
「何かやっていないと気が変になりそうだった。逃げたんだと思う。」
「でもあなたはいつも何か調べてる。医学書の蔵書だって半端じゃないでしょ？
逃げてなんかないんでしょ？あの子を救おうとしてきたんでしょ？
ずっと。」
「・・・医学者の友人の力を借りて随分探ってみた。医学は随分進歩してね、
テロメラーゼを延ばす研究も進められている。
でも３８年の月日を、俺にはどうすることもできない。
どんなに責められても、俺には償うことができないんだ。」
宇佐美はまたボンヤリと窓の外を見つめた。

「今でも3カ月ごとに彼女の体調のチェックをしているけど会うたびに言うんだ。私、大きくなったでしょ？って。自分の命がどこまで届くかわからないんだ。こんな怖い事ないだろ？だけど、あの子はそう言うんだ。」

そして辛そうな目をする。

「でも・・・でもそれは・・」

「あの子が年を重ねるのが怖い。いつまでも小さなままでいてくれたらと思う。」

「なんで怖がってばかりいるの？責めるとか、償うとか、何か違うな。」

「どうして？」

「あの子はそんなこと言いに来たんじゃないような気がするんです。」

「・・・。」

宇佐美が少し不思議そうな表情で稲葉を見つめた。

「大きくなったでしょ？っていうのは、あなたへの当てつけだと思ってますか？」

「違うのかな。」

「大人っぽく見せようとしてるのは貴方を苦しめるためじゃないような気がするんです。」

「・・・・・。」

「あら、シロちゃんは女の子の気持ちがわかるのかな？」

いきなり響いた李々子の声にハッとする二人。

「私が入ってきても気付かないなんて不用心ね。秘密が漏れちゃうわよ。」

ほんの少し冷たく笑って李々子は自分のデスクにバッグをポンと置いた。

「李々子さん。」

「バカな子よね。自分から秘密をばらしちゃうなんて。自分よりも諒が傷つくのがわからないのかしら。」

今日の李々子はいつもと何か違う。稲葉はそう思った。

「諒が怒らないからつけ上がるのよ。」

いつもはこんなトゲのある言い方しない。

「いいよ、李々子。」

「良くないもん。ずっとこんな調子でしょ？」

“何を焦っているのだろう。李々子さんは”
稲葉は李々子をじっと見つめた。

「もうすぐなんでしょ？あの親子がカナダに行くの。
それを言いに来てたんでしょ？あの二人は。」

稲葉にはもちろん初耳だ。

「そうだね。」
静かに言う宇佐美。

「もう充分苦しんだじゃない。」

「・・・。」

「夢もあきらめて、こんな事務所引き継いでくれて、
その傍らでずっとあの親子に心を痛めて、苦しんで。」

李々子は少し赤い目で宇佐美を見つめた。

「ついていく気じゃないわよね？二人に。違うよね？
あなたはもう、何もできないって言ったじゃない。
もう、離れたっていいじゃない。もう充分よ！」

・・・・ここを閉めるって言ったら、李々子怒るかな。・・・・

稲葉は宇佐美の言葉を思い出した。
“李々子さんはもう何かを感じ取っていたんだ。そしてそれを言えずに苦しんでいた。”
稲葉は涙を浮かべて少女のように声を振るわせている李々子に胸が痛くなった。
誰もが苦しんでいる。答えの見つからない、目に見えない呪縛に。
「あの子の体の事が心配なら現地の医療機関に手を回せばいいじゃない。
あの二人だって、来て欲しいなんて言ってないでしょ。」
「だけど、責任がある。」
「ここには責任はないの？ここはただ、あなたの逃げ場だったの？」
「李々子、違うよ。」
「あんな子、いなきゃよかった。」
「・・・。」
「あの子さえ生まれてこなかったら誰も苦しまずにすんだのに！」
「李々子！」
宇佐美が声を荒げた。
今まで聞いたことのない、怒りと悲しみの混ざった宇佐美の声。
李々子は強く正面から宇佐美を睨みつけた。

「大嫌い！」

そう言い捨てると李々子はぶつかるようにドアを開け、
まるでそこから逃げるように部屋を飛び出して行った。

再び残された二人の男はただじっとドアを見つめて立っていた。
追いかけて行ったところで、何も出来ないことは分かっていた。

「みんな、傷ついてる。」

ぽつりと稲葉が言った。

「あなたのせいですよ。宇佐美さん。」

ドアを見つめたままそう続ける稲葉を、宇佐美はゆっくり振り返った。

「うん・・・分かってる。」

「分かってないですよ。」

「・・・え？」

稲葉は宇佐美を振り返った。

「あなたの罪は１３年前じゃない。今ですよ。

昔の過ちに捕らわれすぎて大切な人たちの気持ちに気付いていない、今現在です。」

「稲葉・・・。」

「マユカちゃん、あと数日で誕生日だって言ってたけど、次の満月、つまり明日じゃないんですか？」

「うん・・・明日だ。」

「やっぱり。そうだと思った。」

「？」

「かぐや姫はね、残酷な女じゃない。
月へ帰る事は決めていたけど、やっぱり愛を確かめたかったんですよ。」

「かぐやひめ？」

宇佐美はきょとんとした表情を稲葉に向けた。

「あの子はあなたを困らせるためにあんな課題を出したんじゃない。
さっきの話に戻るけど、大きくなったでしょ、っていうのは宇佐美さんに安心して欲しかったんだと思う。
早く大きくなって、大人になって、そして人並みの時間を謳歌したい。できるんだ。
きれいになって、恋だってして。なんだってできる、普通の女の子なんだ、って。」

「稲葉はなんでも前向きだな。」

「茶化さないでくださいよ！
僕だって伊達に中高生を毎日相手にしてきた訳じゃないんですから。
」

「ごめん、そんなつもりじゃないんだ。」

「・・・で？」

「で？」

「ここまで言っても分からないんですか？彼女のほしいモノ。」

「マユカの欲しいもの・・・・・誕生日プレゼント・・」

「そう、一番あたりまえすぎて気がつかなかったプレゼント。
たぶん、あなたは一度も彼女にあげたことがないんじゃないですか
？」

「・・・・・。」

宇佐美はゆっくりと稲葉の目を見た。

「そう。それですよ、きっとね。　明日はきれいな満月の夜になり
ますよ。」

稲葉はそう言ってまたニコリと笑った。

（くづつ）

あの月が満ちるまでに　第5話（後書き）

次回、最終話になります。

あの月が満ちるまでに　第６話

事務所ビルの屋上。
フェンスの張り巡らされた殺風景な場所だが、邪魔な障害物がないので夜景がきれいに見下ろせる。
そして今夜は何よりも美しい満月だった。
稲葉と宇佐美がその屋上にあがっていくと、もうマユカはその中央でまぶしいほどの月を見上げて立っていた。
月の光の強さで星々は姿を隠し、白いワンピースを着たマユカの影が冷たいコンクリートの上に落ちている。青白くほんわりと浮かび上がるその姿は本当に月からの使者を待っている物語の少女のようだった。

「私が生まれた夜も、こんなきれいな月の夜だったってママが言ってた」
振り向きもしないのにマユカは二人が来ているのを感じ取ったのか、背をむけたまま、そうつぶやいた。
「私、ママの事は大好きよ。何の辛い思いもしないで今まで生きて来れたもん。私がママや宇佐美の隠してることを探って、秘密を知って取り乱した時も誠実に答えてくれた。あの人の側にいれば大丈夫だって思った。ママの仕事の都合でカナダに行くのだって私はけっこうワクワクしてるの」
少女はまだずっと月を見上げている。
「宇佐美は心配性だから自分のこと投げ出して、付いて来るとか言いそうで怖いんだけど。だけど心配いらないから。本当よ」
まるで月に語りかけるように静かに言った後、ようやくマユカは宇佐美の方を向いた。
「・・・ごめんね、宇佐美」

稲葉は精一杯笑おうとしている少女の本当の美しさに胸が締め付けられた。
苦し紛れに月を見上げる。

―――月の光はどうしてこんなに悲しくも美しいのだろう―――

「あんなこと言っちゃってごめん。すごく悪かったって思ってる。なんであんな、宇佐美が辛くなるようなことばかり言っちゃうのか分かんないの。言っちゃった後は決まって苦しくて、夜になっても後悔で眠れないのに。自分が嫌で仕方なくなるのに・・・でも、やっぱりまた酷いこと言ってしまう」
マユカはそこで一度、苦しそうに息を継いだ。
「この前言ったことは忘れてね？　本当は何も欲しいものはないの。今日は・・・今日はね、ただちゃんとお別れを言いたくて・・」
「マユカ」

マユカの言葉を遮るように宇佐美は少女の名を呼んだ。

「マユカ」

もう一度。
そして宇佐美は優しく少女を見つめた。
「もう何も言わないでいいから、マユカ。遅くなってごめんね。君がずっと待っているなんて思わなかったから。俺はずっとその言葉に触れないようにしていた。ずっと逃げてた」
「・・・」
マユカは泳がせていた視線をゆっくり目の前の背の高い男に向けた。
恐る恐る、探るようにその目を見つめる。
宇佐美はそれを優しく受け止めるように、微笑んだ。

「マユカ、お誕生日おめでとう」

真っすぐに宇佐美を見つめていた少女の目から涙が溢れだした。
戸惑うように視線を外し、そしてまた戻す。
小さく首を横に振り、次第に堪えきれなくなったように顔を歪ませながら走り出し、勢いよく宇佐美に抱きついた。
その華奢な体を宇佐美はしっかり抱きしめ、やさしく髪を撫でた。

「ごめんね、マユカ。俺が言っちゃいけないと思ってた。そんな資格ないと思ってたんだ。本当に・・・ごめん。ごめんね」
宇佐美の腕の中でマユカが大きく首を横に振った。
そしてそのまま顔を上げることも出来ずに、宇佐美にしがみついたままずっと静かに泣き続けた。
宇佐美はその髪に優しくキスをし、いつまでもなで続けた。

もう大丈夫だ。
稲葉は少し離れた場所から二人を見つめ、そう思った。

あの子は本当に欲しいものを手に入れた。
自分の存在を許してくれる、魔法の言葉。
欲しくて、焦がれて、でも自分から求めるとウソになってしまう愛の証。

宇佐美は「罪」としてではないあの子の存在を受け入れた。
きっと責任という重圧に押し殺されていた人間的な愛情を、素直に認めることができるんじゃないだろうか。
二人はやっとそれぞれの道を歩くことができる。サヨナラが言える。
けれど・・・あの子はもう一つの宇佐美への想いを封じ込めたまま行くんだ。
本当の想いを。

きっと、どんなに宇佐美が自分のことを想ってくれたとしても、そこに痛みが伴うのを少女は知っている。倫理とか、理屈とかではなく。
だから少女は離れることを決心したのだ。
自分を愛する人を残して、月へ帰るかぐや姫のように。
たぶん、きっと、涙に暮れながら。

◇

マユカを母親の待つホテルまで送っていった後、二人は再びオフィスビルに戻ってきた。
何も言ってないにもかかわらず、ずっと行動を共にする稲葉にここでやっと宇佐美は訊いてきた。
「ねえ、稲葉。なんでずっと一緒にいるんだ？今日ＯＦＦなのに」
「今頃ですか！」
少し唖然として返した稲葉に思わず笑ってしまう宇佐美。
「どうせ僕なんかＯＦＦも暇ですから」
「ひまつぶしか」
そう言ってまた笑う宇佐美。
「でも、ありがとうな」

“依頼ですからね”　ジョーダンでそう言ってみようかと思ったが、なんだか笑えない。
そんな事じゃない。ただ、純粋に側についていたかった。
頭脳明晰でタフで誰の力も必要としないと思っていた宇佐美。
けれど、そんな男のとてつもなく脆い部分を見つけてしまったからには。

エレベーターを降り、事務所に入ろうとした二人の足が止まる。
誰もいないはずの事務所に電気がついている。今日は休日。しかも

夜中。
けれど、誰がいるのかは二人には何となく分かっていた。
そっとドアを開ける。
思った通り、部屋の中には入り口を背にしてオウムの鳥かご越しに夜景をボーッと眺めている李々子の姿があった。
二人が入ってきたのにも気がつかない様子で、魂が抜けたように夜の街を見ている。
ドアが微かにきしむ音でようやくハッとして李々子は振り返った。

「あ・・・・と・・・こんばんは。あの、・・・オウムをね。オウムの様子を見に来たのよ」
慌てたように李々子がオウムのカゴに近づく。
昨日李々子が飛び出して行ってからの初めての会話だった。
「ほら、ごはんあげたり水あげたりしなきゃいけないでしょ？」
やたら落ちつきなく視線が動く。
「そうだね」
やさしく笑う宇佐美。

餌も水も自動で出てくるようにセットしてある。取り付けたのは李々子だったのを宇佐美も稲葉も知っている。なんともソワソワした空気が流れた。
何か言ってあげたい気持ちと、何を言えばいいのか分からないもどかしさと、何か言えばウソになるかもしれない不安と。
稲葉は複雑な思いで二人を見ていた。

「じゃあ、私帰るね。さようなら」
そういうと李々子はドアの横に立っている宇佐美の横をぬけて、あっさりと事務所を出て行ってしまった。
部屋の中はまた重い空気で満たされる。
「宇佐美さん・・・」

戸惑いながら稲葉が口を開いたその時。　再びポーのスイッチが入った。

「リョー」
え？　と灰色のオウムを見る二人。

「リョー、ゴメンナサイ。ゴメンナサイ。　イカナイデ、ゴメンナサイ」

宇佐美と稲葉はしばらく驚いたようにポーを見つめていた。
二人にはハッキリとその光景が想像できた。
「ゴメン。ゴメンナサイ」
一人で思い詰め、窓の外を見つめながら、独り言のようにその言葉をつぶやくあの人の姿が。
「ココニイテ。・・・オネガイ」
ひとしきりしゃべった後、またポーは何食わぬ顔で背をむけてしまった。

「宇佐美さん！」
さっきよりも強い口調で稲葉が言う。
「わかってる。・・・ちゃんと捕まえてくる」
そういうと宇佐美は稲葉の手に事務所の鍵を握らせて、李々子を追うように部屋を出ていった
「・・・捕まえてくるって、オウムじゃないんだから」
稲葉は宇佐美が握らせていった合鍵を見つめながらクスリと笑った。

ちゃんと伝えられるだろうか。
ここ一番って時に、とてつもなく不器用になる、あの人は。
稲葉はガラス越しに夜の街を見おろした。
なぜか分からなかった。

胸の中にホッとした気持ちと、けれど漠然とした寂しさとが入り交じる感覚。
認めたくなかったが、寂しさの方がかなり大きい。
不意に小さな音を立てて、ポケットに入れていた携帯が鳴った。
宇佐美か？・・・いや、知らない番号だ。

「・・・はい。どなたですか？」
少し警戒しながら話す稲葉。
「稲葉くーん？　ひっさしぶりーーーー♪」
脳天気なこの声は。　まぎれもなく、あのオヤジだ。
「卯月さん？どうしたんですか？　なんで僕の番号知ってるんですか？」
「失礼だなあ。私はこれでも有能な元探偵だよ♪」
「いや・・・『だよ♪』・・じゃなくて。まあいいや。で、どうしたんですか？」
「今ね、日本にいるんだ。デートしない？」
あまりにも唐突な言葉。
たぶん、けちょんけちょんに断られるのを前提としたいつもの悪ふざけだ。
けれど稲葉はニヤッとした。

「いいですよ」
「え・・・・。ええーーーーーーーーっ！　いいの？」
「いいですよ」
卯月のかわいいリアクションがなんだか楽しくて仕方ない。
「ど、どうした？　何かあったか？　稲葉くん！　変なもんでも食べたのか？」
「どうもしません。ただちょっと失恋したんです。僕」
「失恋って・・・。誰に？」

「さあ、だれでしょう」
「まさか、李々子にじゃないだろうな。あいつにはそんな価値もないぞ、稲葉くん！」
「さあ。わからないんです。一体どっちになんでしょうね」
稲葉は自分の言っていることがバカバカしくて可笑しくて、クスクスと笑った。
同時にどうにも人恋しくて堪らなくなった。

「・・・大丈夫か？　稲葉くん」
「大丈夫じゃないです」
「稲葉くんっ！」
「どこで会いますか？卯月さん。話したいことがいっぱいあるんです。今夜は寝かせませんよ。朝まで付き合って貰いますからね、覚悟してください」
稲葉はラビットの鍵を握りしめると、もう一度小さく笑った。

（ＥＮＤ）

あの月が満ちるまでに　第６話（後書き）

最後までお付き合いいただきまして、本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0072g/

ラビット・ドット・コム

2010年10月20日14時16分発行